いのであるが、併し吾等が一切の行爲が悉く外界より來る必然の理法に支配せられて自己は其間に何等の取捨も選擇もすることが出來ぬとしては、人は運命の兒、たゞ運命の翻弄に任せて如何ともすることが出來ないことになる。それでは善を勵まし惡を懲らすといふ道德といふものも教訓といふものも存在の價値が無い、人生は決してかゝる無意義なものでは無い。客觀的に見れば萬物は悉く自然の理法に支配せられて毫も意志の自由が無いやうであるが、主觀的に吾等の一言一行を見れば皆一たび自己の意志を經て來たものに外ならぬ。そこで個性差別の上に於てこそ何事も因果の理法必然の關係、宗教的に云へば神の思想に支配せられて毫も自由は無いやうであるが、絕對平等なる本性の上に於ては自由自在なるものと見るのが最も當然であると思ふ。則ち言を換へて云へば主觀的なる道德法としては意志の自由を認め、客觀的なる自然法としては必然の理法を認むるを以て吾等が信念を築くのである。更に之を宗教的に云へば吾等現在の運命は前世の宿因なり、神の豫定なりといふことを許すと共に、吾等、我等の力により、若くは神の冥助によりて將來の運命を開拓すべき資格あるものと信ずるのである。

運命と雜信

運命の問題ほど、宗教に多くの雜信を混へたるものはない。曾て運命なる一文を稿して、此事を簡說したことがあるから、左に揭げることゝする。

運は全く不可測のものとし、たゞ神獨り之を豫知すと想像して、神託を仰ぎて以て自己の運命を豫知せんとしたるは太古の風習にして、其爲には神人の媒介者たる巫女祭官の類を尊び、或は卜占の法を用ひて神意を窺ひ得べしとし、支那に龜卜あり、卜筮あり、泰西に臟占あり。我國に鹿骨の占あり、神意は天象によつて現るゝとして、古くカルデアに於て考星術は發達し、天の十二宮を以て人の運命を判斷す。印度に宿曜經あり。支那の陰陽道と合し、我國に入りては安倍晴明の著と稱せらるゝ金烏玉兎集は、考星術に兼ぬるに五行の卜占を以てし、時間的には年月日の吉凶をいひ、空間的には方位の善惡を說き、佛教の三世因果說と混じては德川時代迷信の結晶たる三世相大雜書を出す。試みに運命に關す

る我が俗間信仰を點檢せんか。

(1) 運命の先天的豫定。

A 過去世より繼承し來るとする者。

佛教の三世因果説を誤解し、輪廻轉生の迷想に出づるもの。

B 生年月と運命。

遠く考星術に原因し、生年(大輪)、生月(中輪)、生日(小輪)の三輪によつて生涯の運命定まるとし、天の十二宮若くは九星によつて判斷する者及び天地萬物を以て木火土金水の五行に出づるとし、其の相生相剋を以て運命をいふもの、若くは之と同一系統に出で十干十二支を以て運命の豫定を説く、淘宮、九星、干支の説多く之に基く。

C 人相竝に手相。

心身の關係は爭ふべからざるの理法なれど、容貌を以て生涯の運命を斷じ、手紋によつて吉凶を斷ずる獨斷的なるもの。

(2) 運命の後天的關係。

A 家相。

空氣の流通、日光の多少は住居と衛生とに密接の關係を有すると雖も、こはたゞ五行九星等の方位によつて其の居住者の運命を談ず。

B 方位。

家相のみならず、自己の行動に吉凶を生ずるは此の空間的制約たる方位に關係ずといふもの、而して此の方位は又生年月と關聯すとなすもの。

C 日の吉凶。

日のみにあらず年も月も亦其人の性に應じて特殊の吉凶あり、又は一般的なるものあつて日々の行動を支配すとするもの。

これらの諸説の中にも沙中に金を求むるが如くに探り探りて幾分の眞理を包含せざるなきにあらざるも、立論の根柢薄弱にして、もと科學的批判を受くべきにあらず、空中に樓閣を

築いて、其の結構の壯麗に誇らんとする如き迷妄のものたるは識者を待たずして知るべし。

こゝにも正信と迷信との區別を考へるが必要である。さて其の運命の豫知に就いて其最も原始的なるものは、神託を受けることにて、之には神の直ちに人に靈告を與へる神託、其中にも夢によつて與ふるものとしては御夢想あり、物によつて豫知せしむるものとして卜占の法あり、原始宗教に於ては此法の行はれざるはなく、轉換の法としては、祈禱が最も勢力がある。祈禱にも諸種の形式あつて、之によつて禍を招き禍を除かんとしたるは、何れの宗教に於ても行はれた所で、祈禱は殆ど宗教の必須條件となつて居るが、物質的の慾望を充たさんとする祈禱は、決して宗教の眞面目では無い。宗教の要は其の特殊なる方面に存する。

解脱に關する問題

解脱の必要

死生命あり、富貴天にありといふは、儒教のみの言でなく、一切の宗教、皆此の過去の宿命、神の豫定と云ふことを云うて、吾等の現在の生活を以て到底人力の豫想し得ざる不可知の原因に由るとせざるは無い。科學者は簡單に之を遺傳と境遇とによつて說明し了らうとするのであるが、精到に吾等が現在の狀態を視察すると、此の遺傳と境遇とのみでは說明し盡されざるものがある。これ實に宗教者の運命なり神の豫定なりといふ所以で、吾等は實に此の知られざる運命に繫縛せられて居るのである。而もたゞ繫縛せられて居るだけなれば、それでもよいが、なまなかに吾等には自由意志があつて、吾等の行動の一半は自己の豫想し得べからざる運命の爲に繫縛せられて居るが、他の一半には自由行動を爲し得べき餘地がある。餘地あるが故に此の自由の意志によつて此の繫縛を免れんとするが、此の繫縛の綱は强くして却々に脫し難い。吾等は樂を欲す、しかも苦は之に伴ふ。吾等は喜びを欲す、しかも悲みは之と共に來る。吾等は生を欲す、しかも死は免るべからず。恰も繩に身體を縛せられて自由自在に動きたいと思うて居るのと同じやうなものである。想うて此に至る、何人も現世を悲觀せざるを得ない。現世は無常

なり死を免れず、現世は苦なり樂あること無し。苦を說くに精密なる佛敎は八苦の說を立てゝ先づ生苦、老苦、病苦、死苦というて人として免るべからざるものとし、世態を觀じては、愛別離苦とて愛するものにも別れざるを得ざるの苦、怨憎怨苦とて憎めるものにも會はざるを得ざるの苦、求不得苦とて求めて得られざるの苦、幷に五陰盛苦とて此身は色、受、想、行、識の五陰によつて出來て居る、此の五陰によつて苦を免れずと示して人生を以て苦の海なり、淚の谷なりと說く。これ佛敎の厭世敎と云はるゝ所以であるが、厭世の意義を存して居るのは獨り佛敎ばかりで無い、一切の宗敎には多少とも此の厭世の意義を寓して居るので之が信仰に入るの動機となるのである。吾等は何故にかゝる悲觀すべき世の中に生れ出たのであるか、吾等は何故に此の如く苦まざるを得ないのであるか、これ皆我等が過去に於て犯し來つた罪惡の果報に外ならぬ。基督敎の原罪說、佛敎の因果說、其の立脚地は違ふが、共に現在の苦を以て罪惡の結果とするに於ては一である。既に現在の苦を以て罪惡の結果とする、然らば吾等が此苦を免るゝの道は此の罪惡を滅するの外はない。併し此の先天的なる罪惡が微弱なる吾等の力で滅

することが出來るであらうか、基督は此に於て人類の罪に代つて其の贖ひを示し給ひ、此の基督を信ずることによつて、深重なる罪惡を滅し去つて神の御國に赴くことが出來るといふ敎示を垂れ給ひ、釋迦は迷ひを轉じ悟りを開くの道を說いて解脫の法を說き給ふ。其他各宗敎の敎祖の示さるゝ所は、實に此の救濟解脫の法に過ぎないのである。

信仰の力

其の第一條件として必要なのは信仰の二字で、基督を信じ神を信ずることによつて救濟の門は開かれ、佛を信じ法を信じ僧を信ずることによつて解脫の道は通ずる。されば基督は癲癇にて屢々火に倒るゝものを癒して、さて弟子に告げて曰く、

爾曹信なきが故なり、我まことに爾曹に告げん、もし芥種の如き信あらば此山に此處より彼處に移れと命ふとも必ず移らん、又爾曹に能はざることなかるべし〔馬太傳十七章〕

といひ、其他「爾曹心に憂ふること勿れ、神を信じ、亦われを信ずべし」「神の遣はしゝものを

信ずるは卽ち其工なり」「キリストを信ずるものは神によりて生れたるなり」等の語最も多く、釋迦は

佛法の大海は信を以て能入とす

と絶叫し、信仰を勸むるの語は八萬四千の法門に充滿して居る。蓋し宗教の他の道德倫理と選を異にする所は此の信仰の一點にあるので、何れの宗教も之を以て第一要件とせざるは無い。如何に下等なる俗間宗教といへども、矢張此の信仰の基礎の上に立つて居るので、其の對象とする所の神によりて救はるゝことを求めざるはない。たゞ其の合理的なると非合理的なるとが正信と迷信との別るゝ所であるから、佛耶の如き高等宗教には一面に於て此の信仰を說くと共に他面に於て其の信ずべきの理由を說明する敎理、卽ち神學なるものが存して居る。信仰は情感的のものであるが、人の心は唯た情感の滿足のみで統一せらるべきでは無く、必ず知識の滿足の之に伴ふを要するのであるから、哲學と其境を接する神學は是非とも必要なるものとなるので、此の神學の解釋によつて其の信仰の態度も動き、同一宗教の上に諸種の分派を生ずるのである。

勿論これら分派の中には、敎理上にはさしたる差異なくして歷史的に差異を生じ來つたものが無いではないが、大體に於て宗派分裂の理由は敎理解釋の異點に因するのである。宗派の分裂は主として敎理解釋の異點に因するのであるが、其の又哲學の分派と異なる所は悉く其の根本信仰を一にするといふ點と、哲學の如く空理空論に走らずして其の信ずる所、解する所を實現して現實に慰安を得るといふ點にある。

人心三方面

されば高等宗敎には人心の三方面たる智情意に亙りて滿足を得せしむるので、情的の信、智的の解、意的の行の三を具備して居る。卽ち

宗敎 ― 人心
- 信仰 ― 信 ― 情
- 知識 ― 解 ― 智
- 道德 ― 行 ― 意

といふ狀態である。先きに云うて來た神、宇宙、死生、運命等の諸說は專ら知識の上の話で、結局信仰に入つて來たので、此の信仰によつて現在の苦を濟はれんとするのである。既に此神を信じ佛を信じ、基督を信じ釋迦を信ずる以上は、基督の言に從ひ釋迦の敎へを奉じて行かねばならぬ。基督敎の方は、神を信じ基督を信ずるといふ信仰一片であるし、釋迦の敎への力は、釋迦の敎へに從つて修行をするといふ必要がある。此に於て佛敎には他力と自力との二方面があつて、基督敎と其の趣きを異にして居る。他力といふは絕對に佛を信じ佛に賴りて救濟せられようとするのであるが、自力の方では佛の敎への如く修行して解脫の境に至らんとするのである。此の修行には三の方法がある。所謂戒、定、慧の三學で、慧といふのは智慧のことで、知識的に宇宙人生の眞相を看破し佛の所說を研究して迷ひを轉じ悟りを開く敎理研究を指し、定といふのは詳しく云へば禪定の事で、心を一所に制し意志を鍛錬して寂靜不動の境に至るので、戒といふのは防非止惡の義で、佛の敎示に從ひ其の戒められたる法律を守るので、尤も普通のが十である。此の十は身に三、口に四、意に三の戒めで身には殺生せず、偸盜せず、邪淫せず、口には惡口せず、妄語せず、兩舌せず、綺語せず、意には慳貪せず、瞋恚せず、邪見せずであるが、專門の僧侶として守るべきものは種々の戒律があつて、其數二百五十の多きに達して居る。此の如き戒、定、慧の修行は到底行ひ能はざれば、偏に佛の力に縋つて救はれようといふのが前に云うた他力である。

現行佛敎

今日本現行の佛敎に就いて自力と他力を別つと、大略左の通りになる。

- 現行佛敎
  - 自力
    - 戒を主とす（律宗）
    - 定を主とす（禪宗）
    - 慧を主とす（天台、眞言）
  - 他力
    - 人格依賴（淨土宗、眞宗、時宗）
    - 法格依賴（日蓮宗）

自力の諸宗は共に戒、定、慧の三を要するので、戒を主とするものとて定慧を廢せず、定を主とするものも戒慧を廢せず、慧を主とするものとて戒、定を廢せぬのであるが、主要とする所を見ると右の如くに云はれるので、他力の方は阿彌陀佛なる人格的實在を信じて之によりて救はるべしとし「南無阿彌陀佛」を唱へるので、南無は歸命歸依の義とあつて信仰の意を示したのである。法格依賴といふのは阿彌陀佛の如き人格的實在でなく、釋迦の說いた經を信ずるので、此の經の名を唱ふる中に一切の功德圓滿すとし「南無妙法蓮華經」と題目を唱ふる宗旨である。これは或は他力の中に列することが出來ないかも知れぬが、今は便宜上かうして示して置く。

自力と他力

話は傍路に入つたが、要するに他力の方は、(基督敎も合して見ることも出來る)天地は悠々にして自己は是れ無常、我心は罪惡に充みて到底自己の力を以ては救はるべきで無いから、自

己以上の神佛の冥助によりて救はれんことを望むので、自力の方は自己はもと神と同じきもの、迷執の爲に今此の如くなつて居るのであるから、修行の力によつて罪惡の根源を斷離し、自己の心の中に存する佛性卽ち神の靈光を徹見して解脫を得んとするのである。其の行く道は異にして難あり易あるが、所詮は宇宙に於ける自己の地位を觀じて其の微小なるを想ひ、天地の悠久なるに比して我生の短かきを思ひ、此の微小なる身も神の懷に入りて安慰するを得、此の無常なる命も神の冥助によりて悠久なるを得んとするに外ならぬ。其の目的は一であるも其道が異なるものであるから、他力の方は純宗敎的であるが、自力の方は倫理的道德的であり哲學的學術的である。併し宗敎は倫理でもなく哲學でもない、其差は僅に一絲であるが、(一)宗敎は信を以て始まり哲學科學は疑ひを以て始まる。(二)哲學科學には不可知の境あり未決の問題あるが、宗敎は此の不可知の境に突入し、未決問題を解決する。(三)科學哲學は眞を究むるに急にして人心に及ぼす影響を見逃すことあるも、宗敎は人心に慰安を與ふるを以て目的として居る。此他尙諸種の異點あるも、其の根本となるは、一は信仰的にして他は研究的である。

研究的なる科學哲學は一切の論理は歸納的にして且つ實驗と觀察とを本とするが、信仰的なる宗教は其の教理の說明として、實驗と觀察とを採用し且つ歸納的の論法をも用ひるが、其の主とする所は教祖の教旨を敷衍する演繹論法である。

宗教倫理

此差はやがて倫理道德にも應用せらるゝので、倫理道德の根本問題たる善惡の分解の如きも、倫理學者の方では或は結果の方に重きを置いて最大多數の最大幸福を計るを善とし、之に反するを惡とし、或は動機に重きを置いて、動機善なれば卽ち善、動機惡なれば卽ち惡とするが、宗教の方では其の善惡行爲の動機なるべき人の心の賴み難きを云ひ、世の中には動機善にして結果惡なるものあり、動機惡にして結果善なるものあり。吾等の望む所は動機善にして結果も善なるべきものなれど、吾等の心は豫め其の結果を豫想し難く、且つ其心に善とする所も或は謬ちなきを得ず、或は心に惡とする所も事實善なるやも知り難し。吾等の心は迷ひ易く吾

等の心は狂ひ易し、此心を以ては善惡を定め難し。たゞ神の教へに從ふ之を善とし、神の教へに背く之を惡とするといふ風に、善惡の標準を人以上の神に取り、其の行爲も亦世間の倫理道德が人を相手とするに反して、人を相手とする時には虛僞を免れざれど、人以上の神佛を相手にする時に於て、初めて淸淨なるを得べしとするのであるから、全然其の趣きを異にして居る。此の如く其の趣きを異にして居るが理を究め疑ひを決して行く態度に於て自力の諸教は哲學や倫理と似通うて居るのである。尙ほ此事は次に說く所の懺悔に關する教義に於て一層明かである。

罪惡の自覺

自力他力の差こそあれ、一切の宗教は現在の生活を以て罪惡に滿てりと云はざる者は無い。現在の生活は罪惡に滿てり、而も我力弱くして之を免れ難し、願はくは神よ我が爲に哀憐の手を垂れて此苦みを救ひ給へといふのが他力で、自己はもと神と同性、佛と何の異なるなく、我心

はもと鏡の明かなる如くなるべきに、無始劫來の罪惡の爲に此の如く迷ひ來つて心鏡曇ること甚し、よし此心の曇りを拭ひ去つて復び本來の明に返らんとするのが自力である。其の行く道は前にもいふ如く異なるが、現在の罪惡を自覺することは則ち一である。此の罪惡の自覺といふことが得信の動機で、罪惡の自覺の無いもの、卽ち自から罪を犯して罪の罪たるを知らず、自から惡を爲して惡の惡たるを知らず、若くは罪惡を善行と信じて居るものには此の自覺が無い。此の自覺が無いから、罪に罪を重ね惡に惡を積みて、終に浮ぶ瀨が無いのであるが、これが何等かの動機によつて罪惡を自覺するに至つて、初めて救濟の門が開かれる。されば釋迦は懺悔の法を說き、基督は「天國は近づけり悔い改めよ」と呼號した。此の悔い改むるといふことの第一歩は罪惡の自覺で、此の自覺の動機は種々あるが大樣內緣と外緣との二に分つことが出來る。外緣といふのは外界の事情によりて自己の罪惡を知るので、例へば他の善行を見て自己の罪惡を反省し、又は聖賢の敎示によりて自己の罪深きを悟るの類、內緣といふのは自己の心內の靈機に觸れて其の罪深きを自覺するので、日常生活の時には、さまでも氣付かざりしが、

中宵人なく夜靜なる時、獨り自己、自己を觀じて慚愧の情禁ずべからざる如きは之である。さて此の罪惡を自覺しても救はるべき道なしと觀ずる時は自暴自棄に流るゝを免れない。

救濟の理想

宗敎の云ふ所は救濟の理想で、釋迦基督の敎旨は、此の救濟の理想を與ふるのに外ならない。さて其の救濟の道として說くのは懺悔、卽ち悔い改めしむるの法である。釋迦は

百年の垢衣も一日に於て洗ひて淨めらるゝが如く、百千劫の中に集むる所の諸〳〵の不善の業も、佛法の力を以ての故に善く順ひて思惟せば、一日一時に於て盡く能く消滅すべし（大集經）

前心惡を作ることと雲の日を覆ふが如く、後心善を起すこと炬の暗を消すが如し（未曾有經）

といひ、基督は

爾曹、夙に習へる舊人、卽ち人を惑はす慾の爲に壞らるゝものを脱ぎ、また爾曹の心の靈を新にし、神に象りて眞理の義と潔とにて造れる新人を衣るべし（以弗所書）

といふ。懺悔は心の垢を洗ふなり、悔い改むるは舊衣を脱して新衣を着するなり、舊生涯を廢して新生涯に入るなり、痛切に罪惡を感じたるものに於て初めて痛切に信仰に入ることが出來る。痛切に罪惡を自覺するものは救濟を求むることも亦痛切であるから、懺悔の心も亦痛切である。宗教の眞面目なる所は此處にある。

根本懺悔と枝末懺悔

さて其の懺悔にも枝末と根本との二がある。枝末懺悔といふのは罪相の上の改過で、道德上の改過遷善は之であるが、宗教上の懺悔は罪相の上でなく罪の本體本性の上で、其の罪惡の根から引き抜くのであるから、其極罪を犯さんとて犯すべきものなきに至らねばならぬのである。されば其の儀式も亦世間の道德の如く人前に懺悔するを以て足れりとせず、佛前神前に至誠を

以て懺悔するので、所謂人を相手とせず人以上の神佛を相手として悔い改めるのである。渾身の至誠を以て佛神の御前に懺悔し、心垢を洗除して新しき人となる。

宗教的生活

これが卽ち宗教的生活に入るのである。親鸞上人の所謂有漏の穢身はかはらねど、心は淨土に住み遊ぶで、此身の姿はもとのまゝなれど心は全く佛神の心と一つになる。此の一つになつた時が眞に信仰を得た時で、神人一致、佛と衆生と感應道交するのである。禪宗では嶮崖に手を撒し絶後に復び蘇へるといふ語がある。此身を佛に投げ出して全く喪身失命して生れ代る如く、舊生活は全く破れて新生活となり、之より我より佛神に向うた信仰が、此度は佛神より我に與へらるゝ力となつて、日常生活を營むので、サバティエといふ宗教學者は「我をひれ伏さしむるものは我を起たしむるの力なり」といひ、或俳人は「飛び込んだ力で浮ぶ蛙かな」と云うて居る。佛神に沒入した信仰の力で浮び上ることが出來て、日常生活に偉大の力を得る

所に宗教の妙はあるのである。東坡の詩に

盧山烟雨浙江潮。　未到千般恨不消。
到得還來無別事。　盧山烟雨浙江潮。

とある如く、信前信後に何の差もないが、信前の生活は願求の生活であり煩悶の生活であつたが、信後の生活は感謝の生活であり、愉悅の生活である。曾てセントベルナードが宗教意識の四階段を示して、(一)己れの爲に己れを愛す、(二)己れの爲に神を愛す、(三)神の爲に神を愛す、(四)神の爲に己れを愛すとした。

第一は自利的生活で宗教を去ること遠いが。

第二は己れの爲に神に冥福を祈るので、開運を祈り病氣平癒を祈る俗間の迷信は此類である。

第三は宗教に沒入したので飛び込んだだけ、ひれ伏しただけで、未だ生活に活力を得たものとは云へぬ。

第四の神の爲に己れを愛するに至つて、日常生活の一舉一動は皆神の爲で、斯くてこそ眞に解脫の境に入らるゝので、孔子の所謂心の欲する所に從つて矩を超えざる妙趣である。さて之に到るには他力の方では至誠心と僞りなき心、深心と疑ひなき心を以て何事をも佛に廻向するといふ廻向發願心の三を要し、自力の方では佛の戒めを守りて非を防ぎ、惡を止めて妄念妄想を斷離し、我心を淸淨にして敢て他の爲に動かされざる禪定を修し智慧を啓發して迷ひを轉じて行かねばならぬ。是等のことは到底此の講話に於て詳細に述ぶることが出來ないのであるから、今は其の大要を述ぶるに止めて置く。

修養道話

修養の話

心とは何か。

世の中に何が解りませぬと云うて、人間の心ほど解らぬものはないので御坐います。と云ふのは心は有るとか無いとか確に言ふことの出來ないものであります。吾々はたゞ心はあると思つて居りますが、凡そ世の中に有ると言へるものは、眼に見ることが出來るか、手に觸れることが出來るか、或は臭ひを嗅ぐことが出來るか、耳で聞くことが出來るか、さう云ふ物であれば有ると言へるのであります。然らば心は有るか、有ると云ふならば見せて見ろと云うても客觀的に心と云ふものは見せる譯にはいかぬものである。圓いとも四角とも、青いとも黄いとも見ることの出來ぬものであります。それならば心が無いかと云ふと、無いと言つて仕舞へば

非常に都合が好いやうでありますが、心が無いと云ふ、其の無いと言ふのは誰かと云ふと吾の心だと云ふことになる。有るかと云つて有りと見ることは出來ない。無いかと云ふと其の無いと云ふのは吾の心だと云ふことになつて、有るとも言へない、無いとも言へない。それで天台大師は、之を有と云はむか實礙なし、之を無と云はんか慮想を起す、强ひて名づけて妙と云ふと申されました。心は妙と名づけるより仕方がないやうなものであります。それであるから心と云ふものは有るか無いか確に言ふことが出來ぬやうなものでありますが、心の働きと云ふものは吾々にも考へられる。こゝに登らうとし、若くは降りようと思ひ、或は右しようとし左しようとするのは心の働きであります。それなら其心の働きはどうして起るものであるかと云ふと、それには外から入る心の働きと、內から起る心の働きとがある。

外から入る心の働きと云ふのは、眼で見る、耳で聞く、鼻で嗅ぐ、口で味ふ。或は身體手足の觸れると云ふ、眼、耳、鼻、舌、身、此の五官の働きで、何を見た、何を聞いた、何を嗅いだ、何を食つたと云ふことが心の中に入つて、初めて心の働きが出來るのでありますが、

此の五官の中で一番人間の心に強く入るものは何であるかと云ふと眼と耳とであります。眼と耳との働きが一番人間の心へ深く入るものである。之に付いて昔の人は面白い議論をして居ります。人間の眼が一番上にあつて其次に耳がある、其下に鼻があつて、其下に口がある、それから觸る。手で觸つても足で觸つても冷たければ冷たいと感ずる。其の觸覺と云ふものはずつと下までである。是はどう云ふ譯かと云ふので昔の人は中々呑氣なことを考へて居る、此の理窟はどうかと云ふと、一番近い所の解るものが一番下にある、一番近い所の解るものが一番下にあると云ふのですから先づ觸覺で、是が(水注しを指し)硬いか軟かいかと云ふことは此處へ手をやつて見なければ解らない。此處へ手をやつてギユツト摑んで見なければ解らない、物に一番直接しなければ、これが硬いか軟かいかと云ふことが解らない。それから口もさうで、物が美味いとか不味いとか云ふのは、たゞ口の所まで持つて來たのでは解らぬ、どうしても自分の口の中へ入れなければ解らぬもので、最も近寄らなければ解らぬものだ。それから鼻になると餘ほど離れた所が解る、梅林などへ行くと素敵に良い香ひがする、鼻の先きへ花を持つて行かな

くとも梅の香ひがする、鼻は直接でなくても大分離れた所が解る。けれども鼻よりもつと離れたことの解るのは何であるかといふと耳でございます。鼻は、幾ら鼻の利く人でも其の範圍に限りがあるけれども、耳にはもつと遠い所が解る、山寺の和尚が鐘を撞いたのも解る、其の和尚が幾ら汗臭くても鼻には解らぬ。そんならば耳が一番遠い所が解るかと云ふと、耳より遠い所の解るのは卽ち眼だ。行き暮らしたる旅の空に、先づ燈火の光りが見えて、それから人の聲が聞えると云ふのでありますから、眼が一番遠い所が解る、其の順序で一番遠い所の解るのが一番上にあるのだと昔の人は說明した。所が近來心理學者は眼と耳とを高級官能、鼻から下を低級官能と名を附けて居る、と云ふのは心の中で何か思ひ出します場合に、眼で見たもの若くは耳で聞いたことを思ひ出す折には單純に思ひ出せるけれども、口で味つたことを思ひ出さうとする折には、どうしても眼の働きを借りなければ思ひ出せるものぢやない。刺肉なら刺肉のうまかつたと云ふ味を思ひ出すには、其色を思ひ出さずに味が思ひ出せるかと云ふと思ひ出せない、口ぢやない、眼で見た色とか形とかで美味かつたと云ふことを思ひ出すのであります。

ちよつと聞くと可笑しいやうですけれども、味ひを思ひ出すは形で思ひ出すのである、味ひそのものだけは思ひ出せませぬ。それで人の心に深く入つて居るのは何であるかと云ふと、耳で聞いたことゝ眼で見たことが入つて居る、これは眼が耳の手傳ひを經て入るのであるといふので、之を高級官能と云うて居る。薔薇の花が良い香ひだと云うても、其香ひを思ひ出すのは香ひだけは思ひ出せない、其の薔薇の花の形を思ひ出すのであります。香水なら香水の色を思ひ出す、香ひだけは思ひ出せない、どうしても眼で見たことを借りて來なければ思ひ出せないのであるから、人間の心には眼で見たこと、耳で聞いたことが一番深く入るが、兎に角此の五官から入つて來るもの、それが外から入る心の働きであります。其外から入る働きにも競爭がある、非常に眼で見たことの感じが深いと、即ち眼で一生懸命に見て居りますと耳で聞いたことを忘れて仕舞ふ、何かに見惚れて居ると人に呼ばれても聞えない。これと同じに何か一生懸命に聞いて居ると眼で見て居ることを忘れて仕舞ふ場合がある。さう云ふやうに五つの中で互に競爭して、強いものが勝ち、弱いものが負けて人間の心に入つて行く。斯ういふ競爭が行はれるので

あります。

今言うたのは外から入つて行く心の働きでありますが、今度は内から外へ出る心の働き、是は人の經驗、或は教育に依つて背違ふのでありますが、人間として總ての人が性來有つて居る所の内から外へ出る本能と云ふものがある。其の本能の中で姑く數へ出しますならば、衣食本能、物を食ふと云ふことは、誰が教へなくても飢ゑれば物を食ひたい、渇すれば水を飲みたいと云ふ考へがある、其の飲みたい食ひたいと云ふ考へは内から外に出る働きであります。それからもう少し複雜になりますと、今度は所有本能、所有本能と云ふのは何でも自分の物にしたいと云ふ慾望であります。之を人間は性來有つて居る、何も知らぬやうな小さい子供でも、お前そんな事を言うたらお前の阿母さんを他所の子にやるぞ、といへば嫌だと言ひます。何でも自分の物にしたいと云ふ慾望を有つて生他所の子にやるぞ、といへば嫌だといふ。其の玩弄物を

れて居るので、玩弄物一つでも自分の物にしたい。是が段々成長しますと、必要な物を自分の物にしたいと云ふのは當然でありますが、必要でない物でも自分の物にしたいと云ふ慾が出

る。實際は必要で無いけれども自分の物にして置かなければ安心が出來ぬと云ふのは人間の一種の慾であります。女の人が三越、白木へ行つて立派な着物を見て、あれが欲しい／＼と云ふ慾望がありますから、それを買つて自分の家へ持つて歸る、必ずしもそれを着なければ成らぬと云ふのぢや無い、それを自分の箪笥の抽斗に入れて置いて、時々出して見て、是が自分のだと思ふのが嬉しい。それならば何も自分の箪笥の抽斗へ入れなくても、何時でも金を持つて呉服屋へ行けば自分の物になると思つて置けば宜ささうなものであるが、それでは濟まぬ。自分の家へ持つて歸らなければ濟まぬと云ふのは人の慾望であります。是は吾々にもある、新聞を見て書物の廣告があります。欲しいと思ふと買ひますが、讀むかと云ふと中々讀まない。讀まないなら買はなくても宜いのであるが、矢張り買はなければ安心が出來ない。是は人の慾です。それからもう一つは、さう云ふ慾望がありますから徒らに人に物を遺りたく無い、人が持つて居れば宜いやうなものであるが、自己を分裂したく無いのでありますから人に遺ると云ふことは、何か他の事情が無ければ、無暗に遺りたく無いものである、それで遺るべき物も遺らずに

濟まさうと云ふ慾になるのであります。それまで酷くならずとも、無駄に人には遺らぬものであります。成るべく遺りたく無いから少し物を儉約する、其の儉約が過ぎると吝嗇になるのは人間の性情であります。次には生殖本能と云ふ卽ち色慾で、男が女によく見られたい、女が男によく見られたいと云ふ考へから致しまして、十錢や二十錢はずんでも車に乘る、或は料理屋へ行つて女中に惜まず金を遺つて居るが、其人が其の日暮しに困る者には一錢二錢を惜んで遺らない、賴む者には遺らないで、賴まぬ者に金を遺つて居ると云ふのは何であるか、是は向ふに女があるからであります。男ばかりでは無い、女でもさうであります。ショウペンハウエルと云ふ人が斯う云ふことを言つた、「女は其前で他の女を譽めると、決してそれに贊成するもので無い」、自分の細君に向つて、何處そこの細君は別嬪だなと言つた場合に、本當に別嬪で御坐いますねと言ふ人は滅多に無い。何處そこの細君は別嬪だな、さうで御坐いますけれども少し鼻が高過きますとか、身長が高過ぎますとか、何とか缺點を言はなければ女は承知の出來ぬものだと言うて居る。餘ほど面白い、ショウペンハウエルは、女は共同の職業を持つて居る

ものであるから、同性間に商賣敵の感があると言うて居る。さう云ふやうに男でも女でも種々性情の本能を有つて居りますから、一方に金を出したく無いと云ふ本能があつても、其の本能を抑へて出さうと云ふ本能が起つて來る。それがもう少し進めば、人間が社會的の生活をして居る以上は、誰でも名譽を好まない者は無い。其の名譽の爲に、譽められたさの爲に、自分が出したく無い金までも出すと云ふことになる、之を稱して個人的本能とか或は社會的本能とか云ふのである。是等も前の眼と耳とが互に競爭して心に入ると同樣に、內から外へ出る心も競爭するのであります。名譽心の盛な人は名譽の爲に食慾を犧牲に供する場合がある、先代萩の千松ぢや無いけれども、武士の子と云ふものは腹が減つて饑もじう無いと云ふ、武士の子と云ふ名譽の爲に、饑じいと云ふ食慾を犧牲に供して居る。さう云ふやうに外から內に入るものと、內から外へ出るものと相爭うて人間の心が成立つて居るのであります。

精神修養の根本義

併しながら今言ふた衣食、名譽、色慾と云ふやうなものだけで無く、人間の心の奥底には道德的感情を有つて居る、人間の實際の道理を知りたいと云ふ心の働きを有つて居る、卽ち情であります。人情を盡すことを望むと云ふ心でありますから、內に此心がありますから、人は常に惡い事をしたく無い、善い事をしたいと云ふ、卽ち眞善美を求むるものである。此の眞善美を望みますのが人の所謂道心、道の心であります。前に申した食欲、色欲、名譽などを求むるのは人心、人の心であります。そこで道心と人心との二つがあつて、是が又非常に競爭する。斯う云ふ事をして金を欲しいが、併しそれは道德上良くないと云ふ道心と、道德には從ひたいが、それぢや巧くいかぬと云ふ人心と互に競爭する、それが競爭するばかりで無く人心の中でも二つが互に爭ふ。外から來る奴が爭つて人の心は何時でも波が立つて居る、朝から晩まで、寢るから起きるまで、人の心は何時でも競爭をして居るものである。あゝしようか斯うしようか、斯うしようかあゝしようかと、思ひ通しに思つて絕え間が無い、これでは何も出來るもので無い。修養の目的は其の波立つて居る心を一つに纏めて、心の落着を極めると云ふことが其の根

本であります。

常には何とも思ひませぬ人でも、眼に物を見、耳に聲を聞きましてから心の波立つ人がある、自分は何とも思はなくても人に言はれて心に波が立つて煩悶する、心配をする人がある。其例と致しましては支那の唐の神宗皇帝の時分に蔡君謨と云ふ人があつた。此人は御茶の本などを拵へて居りまして唐の時代に有名な人でありますが、其人は非常に髭が長い、そこで皇帝が、お前の髭は大層長いが、夜寢る時に其髭を蒲團の中へ入れて寢るか、出して寢るかと言はれた。蔡君謨は毎晩寢て居るけれども、髭を蒲團の中へ入れて寢るか出して寢るか氣がつかぬものですから、出して寢るやうでもあり入れて寢るやうでもあると言うた。併し自分の髭で自分に承知せぬと云ふのは不都合だ、よく考へて見ろと言はれたものでありますから、家に歸つて其の晩蒲團の中へ入れて寢た、どうも寢工合が悪い、是は矢張り出して寢たのだと思つて今度は出して見た、出して見ると寢勝手が悪い、矢張り入れて寢たのだなと入れて見ると寢苦しい、是は矢張り出したんだらう、いや入れたんだらうと、入れて見たり出して見たりして到頭夜通し

眠らなかつたと云ふ名代な話がある。前晩までは入れて居つたか出して居つたか氣がつかなかつたが、それを問はれた爲に心に波が立つて寢られなかつたと云ふのです。是は人に言はれた爲に心が動いて來たのである。もう一つ自分で考へて勝手に心を動かして寢られなかつたと云ふ話がある。昔の話でありますが、或人が神經衰弱と云ふやうなもので御坐いませう、今で言へば不眠症と云ふので御坐いませうが、夜寢られなくて困る、それで禪宗の和尚の所へ行つて、私はどう云ふ譯か夜寢られなくて困ると言ふた所が、其の和尚の答が非常に奇拔で、お前が寢られぬと云ふのは幸ひな事だ、人は人生五十年の半分は寢て居る、二十五年しか活きて居られぬやうなものだ、若し寢なくて濟めば人間五十年の命を百年活きたと同じだ、眠くて仕方がないから寢るのだが、お前は寢られぬと云ふならば寢なくても宜いぢやないか、寢なければ五十年の命を百年活きて居るのと同じだと答へた。成ほど是は面白い。眠いから寢るのだから是から寢ないと極めて仕舞はうと云ふので、それから歸つて、机の前へ坐つて、皆寢て仕舞へ、予は寢ないと極めた、一時になつても二時になつても、予は寢ない〳〵と極めて居つたが、お

いと起されたら丁度朝になつて居つたと云ふ話がある。今までは寢て居つても寢られぬ〳〵と云つて却つて自分を起して居つた。今度は寢ないと極めて、寢ない〳〵でスーツと寢て仕舞つた。是は内から來て心を動かしたのである。此外から來るものと内から來るものに依つて心を動かされて居ると人間は心配が絶えない。若し内から出る心の儘に出來るものならば、それは自由自在である。手足を動かすが如くに思ふ通りに出來るから心配はない。所が動かしたいと思ふばかり思つても實際やらうとすれば行當つて仕舞ふ。動かしたいと思へば思ふほど動かぬと同じに、人が樂をしたい〳〵と云つて、それが出來れば心配はないが、樂がしたいが苦む、悦びたいが悲みがある、ソコで挽いたり悶えたりする。其の根本はといへば活きて居りたいと云ふことに歸着するのである、人間は死ななければならぬと云ふ約束があつて、活きて居りたいが死ななければならぬと云ふことに制限せられるから心の煩悶が絶えないのである。故に修養の根本問題は、先づ人が活きて居りたいと云ふ欲望、人は何の爲に活きて居るのであるかと云ふ根本を極めるといふ所に在るのであります。

人は何の爲に活くるか

それならば人間は何の爲に活きて居るのであるか、斯う云ふ問題、是も丁度前に申した蔡君の髭の話のやうに、大抵の人が蒲團の中に入れて寢て居るか、出して寢て居るかを氣がつかぬやうに、何とも思はずに世渡りをして居りますけれども、人間は何の爲に活きて居るのかと云ふ問題を出されると、答に迷はざるを得ないのであります。若し日々働いて居る人を捉へて、貴方は何の爲にお働きなさるかと云うたならば、必ず答へて、働かなければ食へないと云ふ、或はハイカラに言へば、勞働せずんば生活し能はざるなり、何故働くか、働かなければ食へないに違ひない、何故食はなければならぬか、第二の問題、食はなければ死んで仕舞ふ、それまでは宜い。そんならば第三の問題として、食へば死なゝくても宜いか、食つて居れば死なゝくても宜いやうな氣がするけれども、よく考へて見ると人間と云ふものは、毎日々々活きて居りたい爲に飯を食つて、毎日々々死ぬ方へ近くなる、死にたい爲に食つて居るかと云ふと

さうぢやない、活きたい爲に食つて居りながら毎日々々死ぬ方へ近くなる、だから人は何の爲に働いて居るか、人は何の爲に此世に活きて居るか、さう詮じ詰めて問はれて見ると、結局解らない。成ほど活きて居りたい爲に働くが、活きる方へ近くなるかと云ふと死ぬ方へ近くなる。そんなら死ぬ爲に働いて居るかと云ふと、さうぢや無い、さうぢや無いといふけれども世人はさうやつて居る、人生の根本に逢着すると何人も、髭を出したり入れたりする所ぢや無い、茲に痛切に人生問題の根柢に觸れることが出來るのであるけれども、人間は中々呑氣に出來て居るので、まア大丈夫だらうと云ふ、まアと云ふ奴で大抵行つて居る。是は一つの比喩を申すのでありますが、人間の一生涯は汽車に乘つて旅をして居るやうなものだと思ふ。初め中央停車場から汽車に乘つて大阪まで行くとする、汽車の中には澤山の人が乘込んで居る、自分の腰を掛ける席もない場合と考へる、斯う込合つては困るが、何も是が皆大阪まで行く譯ぢやあるまい、中には平沼あたりで降りる奴もあらう、國府津あたりで降りる奴もあらう、國府津あたりで降りる奴もあらうから、それが降りさへすれば自分は樂になるのだと思うて居る、辛抱し

て乘つて居ると、成るほど平沼、國府津あたりで降りる奴もあるが、矢張り乘る奴があつて依然として窮屈だ。そんなら其折に失望するかと云ふと失望しない、此處でもまだ窮屈だが沼津まで進行すれば、どうかなるだらうと云つて先へ行く。所が沼津、靜岡まで行つても矢張り込む、濱松まで辛抱したらどうかなるだらう、こんな風でダラリ〳〵で進んでゆく、丁度人間もさうです。年の暮に過去一年の事を考へて、今年はどうも巧く行かなかつた、併し來年は、どうかなるだらうといふ、それは丁度次のステーションを思ふやうなものです。今年は詰らなかつたが來年はどうかなるだらう。次のステーションへ行つたらどうかなるだらうと、豐橋、名古屋、段々先へ先へと行く。到頭立通しで京都まで行つた、京都へ着くと人が澤山降りる、漸く樂になつた。腰が掛けられると云ふ時分には次の大阪で降りなければならぬ。人が來年は樂になるだらう、來年は樂になるだらうと年を送つて、やう〳〵樂になつた時分には棺桶に片足を入れて居る、丁度そんなものであります。それから又汽車ならば東京から大阪まで行くと極つて居るが、人間が世に生れて來て一生を送るのはさうはゆかない。生れる前は如何なるもので

ある、死んでから後は何處へ行くのである、生の前に暗く死の後に暗い、生前死後の暗いのが吾々の一生涯であります。丁度人間の一生は、黒暗々たるぬばたまの暗夜に、一の燈火を點して來たやうなものであります。其の燈火の點つて居る間が人間の一生、フツと消えて仕舞つたのが人間の死であります。

燈火の消えていづこへ行くやらん
暗きぞおのがすみかなりけり

と云ふ歌があります。暗夜の燈火がフツと吹き消された如くに消えて仕舞つた、其の一瞬の明るみの間が人間の一生涯と言はれて居る。此明るみの間の一生涯を、何の爲に活きて居るのであるか、何の爲に働いて居るか、詮じ詰めて見ると、どうも了解に苦む所のものがある。何の爲に人間は活きて居るのか、何の爲に吾々は働かなければならぬかと云ふ。此の根本問題に付いて考へを廻らします所に吾々の修養の土臺が附いて行くのであります。

天地の大道

此に於てもう一つ考へて見ると、吾々が營々として働いて居るのは、活きて居りたい爲めである。世の中に何が一番大切かと云ふと、普通に人は金と云ふが、金より大切なものは何かと云ふと命である。所が其命は時々刻々に消えて行くべきものであるならば、其の命以上に大切なものが世の中にありはしないかと云ふと、在る。何が命より大切なものであるかと云ふと、それは人の道であります。昔の志士仁人が、國の爲め君の爲に、命を抛つて顧みなかつたのは、人の命以上に更に高き道があつたからである。此道を自分の身體に體得して行きますのを道德と云ふ、そんなら道とはどんなものであるかと申しますと、是れ古今に通じて謬らず、中外に施して悖らずで、如何なる所でも、如何なる時でも易らないものを名づけて道と云ふのであります。其道と云ふことを一々言うて居りますと非常に時間を費しますから、其の肝要なる點を擧げますと、天地間には三つの原理がある。三つの規則がある。是が西洋へ行かうが、東洋へ

行かうが、昔でも今でも變らない。

其の三大原理とは何であるかと云ふと、第一に此の天地間には一つとして同じものが無いと云ふ規則であります。ちよつと聞くと可笑しいが、天地間に同じものは一つも無い。似た物はあるけれど、同じ物は無い。此の私と云ふものは、世界廣しと雖も、萬國多しと雖も、私の外に私は無い。此處にある土瓶と云へば世界廣しと雖も、萬國多しと雖も此の土瓶の外に此の土瓶は無い、天下一品なんです、之を獨立の原理と云ふ。何でも一つしか無い。髪の毛は皆同じだと云ふやうに思へるが、同じならば皆同じ所に生えて居る筈である、違ふ所に生えて居る以上は違つて居るに違ひない、是が一つの規則。

其次の規則は、天地萬物、姿形は皆違ふけれども、其本は皆同じものであると云ふ規則です。是は餘ほど面倒なことでありますが、天地萬物皆同じもので無いと云ふ規則の次に、天地萬物姿形は違ふけれども同體であるといふ規則、之を同一の原理と云ふ。これは前のと反對で天地間に違つた物は一つも無いといふのであります。私と言へば違つて居るが、人間と言

へば皆同じである。更に動物と言へば禽獸蟲魚、皆同じものになる。更に進んで考へて見るならば私と此の土瓶は何處が違ふ、此の土瓶は何で出來て居るか、土で出來て居る。人は何を食つて活きて居る、米を食つて活きて居る。米は何を食つて活きて居るか、土を食つて活きて居る。さうすると米は土の子で、人間は土の孫である。即ち溯つて考へて見ると土瓶と人間とは同體である。斯う云ふ事を說いて行きますと、哲學上の唯物論、唯心論と云ふやかましい問題になるので、其の說き方も學者に依つて樣々の議論がありますけれども、兎に角、萬物の本は同じ物だと云ふことに一定して居るのであります。姿は違つても本の同じものが、互に持ちつ持たれつして出來て居る。之を萬物調和の原理と云ふ。天地萬物が調和して持ちつ持たれつ出來て居ると云ふことは宇宙の原理である。持ちつ持たれつして居ると云ふことは、一つ動いたからと云つて一つの物が動いたのでない。福澤先生が曾て或人に話された最も面白い例がある。例へば此處に土瓶がありますが、此の土瓶をちよつと右から左へ動かしたからと云うて、人から見たら大事件と思ふまい。加藤なるものが土瓶を右より左へ動かしたと云ふことは何で

もないやうだが、併し中々何でも無いのではありません。乃ち土瓶が此處に斯うやつて居るのはどう云ふ譯か、これは地球に引力があるからで、若し地球に引力が無かつたならば飛び上るかも知れない。之は物理上當然の理窟であります。それ故に地球に引力があつて引つ張られて居るものを、此方から此方へ動かしたならば、少しではあるけれども地球の引力にビリ〳〵ツと位は影響したらうと云ふ。中々面白いです。それから後が面白い。そんなら地球と太陽とはどう云ふ關係であるかといふと、矢張り引力の關係で、地球が引ツ張り太陽が引ツ張りして居る。それならば此の土瓶を動かした爲に地球の引力がビリ〳〵ツと動いたのであるから、太陽の方もビリ〳〵ツと位は動いたに違ひない。成るほどさう云ふものでせう。更に太陽とか、土星とか、海王星とか金星とか云ふ八大遊星七百有餘の小さい星がある。其の星と星との關係はどうかと云ふと矢張り引力の關係であるから、太陽の引力がビリ〳〵ツと動くならば、土星、海王星の引力もビリ〳〵ツと位は動くに違ひない。さうなると此の土瓶の動いたと云ふことは中々小事件ぢやないと云ふことを話されたのであります。して見ると天地間の物は互に持ちつ

持たれつして居つて、一つの物でも中々少しのものではない。此机の上に一つの埃が落ちて居る。此埃は如何して來たのか其埃は如何して出來たかと云ふことを十分に說明するには天地間の事を皆說明しなければ分らぬ。例へば此埃は何である。紙片である。其の紙片は如何して出來たか、紙は襤褸なら襤褸から出來た。其の襤褸は如何して出來た。木綿であれば、それは木から出來た。其木なるものは如何して出來たかと云ふと、地球の熱が或程度に達した時、生物を生ずる。其の生物が發達して木綿と稱する木が出來た。其の地球の熱は如何して出來た。太陽の熱を分布したのである。其の太陽の熱は如何して出來たか。太陽らあるのであるが如何して出來たか解らなくなる。もう一つ、此埃は如何して此處へ來たか、風が持つて來た。風は如何して來たか、風は空氣の流通である。空氣は如何して動いたのか、即ち東洋の低氣壓が滿洲地方の高氣壓に對して流動したから風となつたのである。其の低氣壓は如何して起つたのか、太陽の光線に關係する。其の太陽は……何處までも行くのです。だから埃一つでも天地間の事が解らなければ解釋が出來ませぬ。何故であるかと云ふと、天地間に

ある物は持ちつ持たれつして居つて、一つの物として獨立して居るのでは無い。持ちつ持たれつして居ると云ふことは今申した所で解るのであります。

社會の共同生活

それならば、それが天地の道理であるならば、其の道理を人間の世の中に持つて來た時には如何かといふことを考へて見ねばなりません。赫々たる太陽が光と熱とを吾々に施し、滾々として流れる水が潤ひを施して呉れる。この自然が吾々に惠んで呉れる物が無かつたならば吾々は一日も世に生活することが出來ない。唯自然の力ばかりぢやない。人間の現在の生活は、食ふにつけ着るにつけ、皆多くの人々の助力、多くの人々の力が集つて初めて出來るのである。汝の食ふ所の米は汝自から作りなせるか、汝の着る着物は汝自から織りなせるか、汝の住うて居る家は汝自から造りなせるかと尋ねたら、自分の力で出來た物は何も無い。人の力が集つて現在の生活が出來て居ると云ふことは解り切つて居るのであります。唯空間的に見ましても

現在自分の生活は、食ふにつけ着るにつけ、皆人の力ばかりでありますが、たゞに今活きて居る人の力ばかりではない。何千年も前からの人が世の中を進歩發達さして呉れたお蔭である。其のお蔭で今日の生活をして居るのであります。一體世の中は如何して進んで行くかと云ふとインペンションと、イミテーション即ち發明と眞似である。吾々の社會は遠き過去から今日に至るまで常に發明と眞似と云ふことに依つて進歩して來て居るのであります。何でも初めは誰か發明したに違ひない。其の發明の眞似をする、また眞似をする。之が世の中の進歩の道理である。飯を食ふには左の手で茶碗を持つて右の手で箸を持つ。之はずつと以前に誰か發明したに違ひない。自分は阿父の眞似をやつて居る、阿父は祖父の眞似をやつて、祖父は曾祖父の遺つたのを眞似たのである。さういふ風に何でも先祖代々眞似をやつて來て居るのであるから、今日の生活は自分より前に生れた、ずつと昔に生れた多數の人の惠みに依つて生活して居るので、一人でやつて居るのではない、持ちつ持たれつして居るのであります。現在の生活は皆人の惠みを受けて居るのであるから、吾も亦世の中の人の爲に何事をかして行く

のが人間の道だと云ふことを心得ねばなりません。今日多くの人の生活が共同生活の力であるならば、吾も亦世の中の人の爲に何物をか貢獻すると云ふので持ちつ持たれつになる。之を共同生活と名づける。自分の餘つた物を以て人の足らざるを補ふ、人の餘つたものを以て自分の足らざるを補つて行くのが人の生活の狀態であります。智慧が過ぎれば智慧の足らざるを補ひ、金が過ぎれば金の足らざるを補つて行くのでありますから、職業の上から言ふと、或技能に長じた人が他の技能に長ぜざる人の爲に補つて行くのが社會の共同生活であります。自分は共同でない積りでも必ず人の力に賴つて居るのである。若し世の中の人が、予は一人立ちであると云つて世の中の人の爲に働く考へが無かつたならば、それは持ちつ持たれつでない。持たれつ持たれつである。現在吾々の生活して居るのは、吾々より前に生れた人が色々發明して置いて呉れたお蔭であるから、此の世の中を今一層立派に、今一層完全にして、次に來るべき子孫に讓り渡して行くと云ふことが人の道である。又社會の共同生活を助け、其の進步發展に向つて貢獻して行くと云ふことが人の道である。

唯道あるのみ

人は何の爲に働いて居るかと言へば活きて居りたい爲と云ふけれど、何時か死なねばならぬ人間である。だから人は活きて居りたい爲に働くのぢやない、働くべき爲に活きて居るのである。働くとは何ぞや、社會の共同生活を助け進步發展に貢獻すると云ふ人の人たる道を行ふことである。若し働いて此道を行ふことが出來るならば車夫馬丁と雖も我悅んで之をなさん。此の行ひを爲し能はずんば高位高官我に於て何かあらん。人はたゞ此道の爲に活きて居るのである。昔吉田松蔭が、小塚原に於て首を斬られる折に何と言つたか、

「活きて居つて天下國家の爲になるならば飽くまでも活きん、死しても不朽の名を成し得べくんば我死なん、大丈夫眼中生死無し、道あるのみ」

活きもする死にもする、活きて居りたいと云つても死なねばならぬ。各々は活きて居りたい爲に働くのぢやない、働く爲に活きて居るのである。働くとは何ぞや。人の人たる道を務むる

が爲め、其の職務の爲めには命をも捨てると云ふ覺悟があつて初めて道を行ふことが出來るのではありませぬか。軍人を見ると能く解る。軍人は何の爲に月給を貰つて居るか、職のある時の爲である。彼等は一旦緩急ある場合に命を捨てゝ働く爲に活きて居るのであります。是れ豈軍人のみならんや、總ての仕事は、其の仕事の爲に活きて居るのである。道を行ふ爲に活きて居るのであつて、活きて居りたい爲に働くのぢやない。働く爲に活きて居る、道を行ふ爲に活きて居るのであると云ふことになる。卽ち職業の爲には命を捨てても顧みないと云ふことになるのであります。楠正成が

身の爲に君を思ふはふた心
君の爲には身をも思はず

と云ふ歌を詠んで居りますが、自分の身の爲に天子を思ふのは二心である。天子樣の爲には自分の身をも忘れると云ふのが本當の精神である。自分が活きて居りたい爲に働くのは間違つて居る、働く爲に活きて居る、働くと云ふと語弊があるが、人の人たる道を行ふが爲に活きて居

るのである。斯う考へなければならぬのであります。斯う云ふと、成るほどさうだ、さうだけれども社會の共同生活を助け、進步發展を補ふと云ふやうなことは、大政治家、大實業家、大教育家と云ふやうな大きな人ならば、其人の働くと働かぬとが共同生活の進步發展に關係するであらうけれども、自分のやうな小さい仕事をやつて居る者が働いたからとて、社會の共同生活を助けるやうな大したものぢやない、又進步發展を補ふと云ふやうな大した仕事ぢやないと云ふやうな人があるならば、其人は自から獨立の原理に因る天下一品の自分であると云ふことを忘れて居るのである。世の中は持ちつ持たれつして居るならば、大政治家、大實業家だけで世の中はいけるものでない。如何なる小さい仕事をして居る者でも、矢張り社會共同生活の一員として互に持ちつ持たれつして居るのだといふことを自覺せねばなりません。此事の一番解り易いのは時計であります。時計の表には、たつた二本の針しかありませぬが、其裏には多くの機械があります。其の機械が互に持ちつ持たれつして時計が廻つて居る。若し其中の一番小さい針が拔けて仕舞つて足らなくなつても其の時計は狂ふ、大きな針が拔けたのと同し

である。時計全體から見れば其の時計の狂ふことは、大きな針が一本抜けても小さい針が抜けても同じものである。故に自分の仕事が如何に僅であらうとも、自分の仕事が如何に小さからうとも、所謂、持ちつ持たれつして居る社會の共同生活の一員であるから、自分の一擧一動が直ちに社會の共同生活に關係するものなりと云ふ自覺を以て、自分々々の仕事をやつて行くと云ふことが所謂人の道である。だから大きいのは社會の共同生活で、小さいのは社會の共同生活でないと云ふことは言へぬ。一つの埃でも、これを說明するには宇宙全體を說明しなければならぬ如く、一つの小さい機械の狂ふと狂はぬとは全體の時計に關係するのであります。何を小と云ひ、何を大と云ふかと云ふと、之は假に區別をして言うた話で、前の福澤さんの話の、此の土瓶をちよつと動かしただけでも宇宙全體が動くやうなもので、是れ小か是れ大か、小にあらず又大にあらずして、此手の指を曲げたと云ふことは小事件だけれども、朝鮮人の短銃を持つた手の指が、ちよつと動いた爲に伊藤公が殁られたのであります。伊藤公を亡くしたのは東洋の大事件、世界の大事件、日本の大事件である。如何してさう云ふ大事件が起つたか

と云ふと、朝鮮人の指の先がちよつと動いたからである。動かなければ、あゝ云ふ大事件にはならない。大である小であると云ふのは其の結果の上に見えるのであるから、自分の仕事が大である、小であると云ふやうなことは考へずに、自分の雙肩には共同生活の進歩に貢獻する大なる任務があると云ふ精神でやつて行く中に人の道があるのです。

獨立獨歩

誠は天の道也、之を誠にするは人の道也と云うてある。所が誰でもさう遣りたいのでありますけれども中々うまく行かない、と云ふのは先程申しましたやうに外界から來て吾々を眛ましし、內界から來て吾々を迷はす爲に、何か事を爲さんとしても、人の毀譽褒貶に動き易い本能、慾望の爲に自分の主義も枉げられるものである。人が偉いと云ふとそれを遣りたくなる、人が偉くないと云ふと遣りたくならない。人は人の毀譽褒貶に動かされるものである。人の毀譽褒貶に動くと云ふのは、まだ自分の守る所が確でない人である。自分で守る所が確であつたならば

人の毀譽褒貶に依つて動く筈がない。佐久間象山先生、之を普通はシヤウザンと申しますが信州の御方はザウザンと云ひます。其方が本當かも知れませぬ。其の佐久間象山が斯う云ふ事を言うて居る。「人我を譽むれども一絲を加へず、人我を誹れども一毫を減ぜず」、人が偉いと云つても偉い譯ぢやない。人が偉くないと言つても必ずしも偉くない譯ではないが、人に丈が高くなつたと言はれると、五尺の身體は何處までも五尺の身體であるけれども、丈が高くなつたやうな氣がする。低いと言へば、さうかも知れないと思ふ。偉いと言へば附け上り、偉くないと言へばしをれると云ふのは毀譽褒貶の爲に動かされて居るのであつて傀儡の如きものである。自から守る所が確であるならば人の毀譽褒貶で動くべきものでない。筆嘴と云ふ書物に斯う云ふ事がある。「自分が人に惡口を言はれて怒るならば、其の相手を考へて怒るが宜い、相手が若し小人であれば向ふの言ふことが詰らないのだから怒ることはない。相手にするに及ばぬ。若し向ふが君子であるならば、向ふの言ふ事が尤もなのであるから怒るに及ばぬ」、面白いです。何方でも怒らなくて宜い、「彼は小人ならば彼の言ふこと非なり、何ぞ怒るを須ひん、彼君子ならば彼の言ふこと是なり、怒るを須ひざるなり」。所が人の毀譽褒貶に依つて上つたり下つたり心の動くのは自から守る所が無いのである。谷川の小さい石は水の流れに從つてコロ〳〵動いて行く、人の毀譽褒貶に依つて動くのは谷川の石と同じである。自から守る所が確であれば決して動かない。卽ち大きな石であれば、どんなに水が來ても動きませぬ。日光の大谷川に大きな石がある、あれなどは上流に流れる。何故といふに其石に水がぶつかつて、其勢ひで自然に石の下が掘れる爲に却つて上流の方へ轉げて行くと云ふことであります。若し自から守る所が堅固であつて、毀譽褒貶に動かなかつたならば共同生活の進歩發展に貢獻することも出來るのであります。故に他の毀譽褒貶に動かされることなく、自己の慾望を征服して己れに克つの工夫をしなければならぬ。己れに克ち、私利私慾に打勝つて行くと云ふのが修養の工夫の第一であります。百戰敵に勝つを勇者なりとせず、己れに克つを以て勇者なりとす、戰ひに勝つたと云うても、それは眞の勇者ではない、己れに克つのが眞の勇者であると云ふのであるから、自分の守るべき所を守り、天下一品、獨立獨歩の人間として、堅忍不拔の精神を以て世の中に立

つたならば、決して毀譽褒貶に動かされると云ふやうなことは無いのであります。

同情の力

所が心は確乎として居つても自分だけでは世の中に立てませぬ。互に持ちつ持たれつして行くのである。持ちつ持たれつして行く以上は其處に同情と云ふものが無ければならぬ。人と人との調和を圖るのも道德の一である。孔子の所謂忠恕の敎へ、孟子の所謂仁義の敎へ、釋迦の所謂慈悲の敎へ、基督の所謂愛の敎へ、何れも人と人とを結び付けて行くの道であります。人と人とを結び付けるには同情の念、思ひやりと云ふことが必要である。自分は他に動かされぬ。已れに打克つと云ふ自信を以て行くが、人に對しては同情の念を以て行くものでなければ何事も爲し得るものでない。世の中は一人では行けぬものならば、直接間接に多くの人の世話になつて居るのであるから、吾も亦人に對して同情の念、慈悲の心を以て行くのが人情の美であります。世の中に何の力が強いかと申しましても、人を愛すると云ふ慈悲同情、思ひやりの力

ほど強いものは御坐いませぬ。愛は力なりとか、仁者に敵無しとか古人が申しましたが、思ひやりの心を有つて居る者は、天下の者をして悉く自分に同化せしむることが出來るのであります。自分に對しては毀譽褒貶に動かぬやうに、自己の慾望に打克つ工夫をし、他に對しては同情の念、慈悲の考へを以て行かなければなりませぬ。人を使ふのに、權力を以て人を服せんとする者は權力に依つて衰へる、利益を以て人心を得んとする者は金の爲に衰へる、何ぞ利を言はん唯仁義あるのみと孟子が言ふたが、精神を引締めるの道は仁義の外には無い。私はよく申しますが關ケ原の戰爭に、負けるに極つて居る西軍に味方をして命を捨てた大谷刑部吉隆に斯う云ふ逸事が傳はつて居る。何故に大谷吉隆が負けるに極つて居る石田に味方をしたかと云ふと、是は太閤の同情の感化であると云ふ話であります。御承知の如く大谷吉隆は癩病に罹つて居りまして、關ケ原の時には絹で身體を包んで戰をして居つた位で其肉は腐つて居つた。所が豐太閤が生前に多くの大將を招んで茶の湯をした時、濃茶でありますから飲み回しであります。大谷刑部吉隆が飲んだあとを飲まなければならぬ。癩病患者のあとでも、仕方がない、する

と大谷刑部の次に居た加藤であつたか、福島であつたか、飲んだ振りをして次へ回した。次の奴も矢張り飲んだ振りをして次へ回す。何時まで經つても茶は減らぬ、之は氣味が惡いです。所が其折に、石田三成が飲んだと云ふ話もありますが、私の見たのでは豐太閤と書いてあります。太閤が其の樣子を見て、茶の飲口甚だ惡し、吾改めて之を飲まんと、其の飲み餘しを大將自身が飲んだ。それを見た大谷が、吾はかゝる病であるから口を附けはせぬ。然るに諸將の吾を疎むこと斯の如であるのに、大將たる秀吉が吾の飲み餘しを飲んで呉れた。此君の爲に命を捨てるのは武士の本懷であると覺悟した。此の豐太閤の同情の念が、大谷刑部吉隆をして負けるに極つて居る西軍に味方をせしめた所以であると云ふことであります。斯の如く人を感ぜしむるの力は、同情、愛より强いものは無い。世の中の生存競爭は優勝劣敗であるから飽くまで働かなければならぬけれども、若し同情の念が無かつたならば世の中はうまく動くものではない。世の中が生存競爭、優勝劣敗で動いて行くのは機械が動くのと同じである。機械の動くのは油を注して調和して行くからである。油が無いと摩擦して火を發し機械を破ることが分つ

たならば、世の中の生存競爭にも同情の心、慈悲の念と云ふ油を注いで圓滑に回して行かなければならぬ。是が共同の心を以て、他に對しては慈悲の念を持ち、自からは他の毀譽褒貶に動かぬやうにして、誠心誠意を以て行けと云ふことであります。

眞の我

其の誠心誠意とは何ぞや、即ち誠の眞であります。眼で見、耳で聞いて、欲しい、惜しい、可愛いと云ふ心は表面の心である。其心の奥の又奥に眞の心と云ふものがある。眞の心とは何ぞと言へば眞の我である。眞の我と嘘の我とある。我と言へば一つのやうでありますが、よく考へると、酒でも飲み過ぎて腹を立つて人などを撲る。撲つて置いて醉が醒めると、あゝ惡かつたと考へる。其のあゝ惡かつたと云ふのは誰だ、我だ。撲つたのは誰だ、我だ。そんなら何方が本當の我だと云ふと、ボカンとやつたのは本當の我ではなくて、あとで惡かつたと云ふのが本當の我だ。是れ眞の我が心の主人公であります。昔の禪宗の和尚で毎日々々「主人公々々々」

と呼んで、自分で「オー」と返事をしたと云ふ人がある。是は禪宗の一つの公案ですが、自分で主人公々々々と呼んで、自分でオーと答へる。御主人公が時々御不在になるから、それで呼び起すのです。中江藤樹先生が或人に贈つた手紙のうちに、

心裏面に常住不息の良知の主人公御坐候。この君に對面なされ工夫御勤めなされ候はゞ、

いつとなく浮氣除き申すべく候

とありますが、此の主人公が留守にならないやうに、取つ捕まへて行くには三個の順序がある。此の主人公は御不在になるが時々お歸りになる、お歸りになつたらお出掛けにならぬやうに引止める、之を發心と名づけます。御差支があるかも知れませぬが、飲酒家を例に取つて申しますと、酒を飲んで、二日醉で頭が重い。こんなに頭が重いのなら酒は止めよう。之は主人公の御歸宅の時である。止めると言ふから止めるかと思ふと、晝頃になると少し頭が輕くなる。二日醉には迎酒が好いから一杯やらうか知らんといふやうになる。其折には御主人公がお出掛けになつて居るのであるから何にもならぬ、御主人公は出たり入つたりして居る。一遍歸つたら

それを捕へなければならぬのに、發心だけでは御主人公がお出掛けになる。其處で飲まぬと云つたら如何しても飲まぬと云ふ決心、此の決心が無ければならぬ。何でも決心が無ければ出來るものぢやない、善い事でも惡い事でも發心だけでは出來ぬ、決心してから本當にやるのです。所が此の決心で御主人公を取つ捕へても、三日決心、四日決心と云ふやうなのがあつて、もう酒は飲まぬと三日四日は偉かつたが、五日目、六日目、十日目となると、

わが禁酒破れ衣となりにけり

それついで呉れそれさして呉れ

と云ふやうなことになるから、第三に相續心と云うて續ける心がなければならぬ。發心をし、決心をして相續心で、もう酒は飲まぬと云ふ決心を續けて行けば、習慣が第二の天性となつて飲まなくても宜いやうになる。さうして遂には心の欲する所に從つて矩を踰えずと云ふ境涯にまで行かなければならぬ。此の發心、決心、相續心を或人が戰國時代の豪傑に譬へて居ります。織田信長は發心だけであつて決心、相續心が無かつた。發心だけでやるから早まつてやり損ひ

がある。所が秀吉になりますと發心だけでなく決心があつた。發心と決心とを以て考へを極めてやつた場合が澤山ある。有名な話でありますが、小田原の北條攻めの時には中々苦戰で隨分長くかゝつた。それで秀吉も餘り長いものだから退屈をしまして、大阪から能役者を招んで、陣中で能狂言を遣らせ、酒を飲んで居つた。すると浮田中納言の客分であつた花房助兵衛と云ふ人が居つたが、此の花房が秀吉の能狂言を遣らせて居るのを見て、長い對陣に依つて左なきだに兵氣が阻喪して居るのに、大將たる者が能狂言を見て酒を飲んで居ると云ふのは何事である、秀吉は大馬鹿者であると罵つた。秀吉がそれを聞くと怒つたの怒らぬのではない、「門前で予を罵つたのは何者だ」。「浮田中納言の客分花房助兵衛と云ふ者で御坐る」。「浮田中納言を呼べ」。浮田中納言がそれへ出ると、「お前の客分で斯う云ふ者が唯今予を罵つた、不都合であるから磔刑にする」と云つて怒つた。浮田中納言も據ないから承知して其處を出かけると、秀吉が考へた。「待てよ」、是が發心です。後で考へて、是は不可ぬ。予が酒を飲んでも誰も惡口を言うた奴が無い、誰も言はぬのにあの者が言うたと云ふのは中々面白い。よく考へて見ると

左なきだに兵氣が阻喪して居るのに大將が能狂言などを遣つて居るのは良くない、彼の申す所一理ある、「浮田中納言を呼べ」。呼返されて歸つて來ると、「唯今よく考へて見ると彼の者の申す所も一理ある。磔刑にするのは不便であるから切腹を申付ける」。「有難う御坐る」と浮田が歸る。また秀吉が考へた。待てよ、斯く多くの中に誰一人予の惡口を云ふ奴は無い、然るに予を罵つて反省を促したと云ふのは中々見上げた奴だ。「浮田を呼べ」と云ふので、玄關まで行つた浮田中納言を呼返して、「よく考へて見ると感心な奴だ」。此處が決心です。「感心な奴だから褒美を取らして宜からう」と言つたと云ふ。近古史談にも出て居る有名な話であります。秀吉は發心だけでやつては居らぬ、決心をして居る。所が德川家康になると、發心、決心ばかりでなく相續心を有つて居る。是は私共がこんな事を言ふまでもなく昔の人が發句にして三人を對照して居ります。郭公が啼かなかつたと云ふので織田信長は、「啼かぬなら殺してしまへ郭公」と詠んだと云ふが、信長が作つたのでは無い、信長の氣性を詠んだのであります。所が秀吉は「啼かぬなら啼かして見せう郭公」の決心がある。所が家康は「啼かぬなら啼くまで待

たう郭公」で、家康は相續心のある人である。是は勿論後の人が拵へたのでありますが、兎に角發心だけでも不可ぬ、決心だけでも不可ぬ。發心、決心を相續心で續けて行く、さうして自分の行ひは何時でも誠心誠意から出る。かくて一日又一日、社會の共同生活と進歩發展とに向つて、僅なりとも貢獻すると云ふ覺悟で行くのが吾々世渡りの道ではあるまいかと思ひます。

精神の修養に付いては、此の以外にもまだ色々の問題がありますが、今日は其の大體を大摑みにして申しただけであります。尙此の一々の問題、一つ〳〵の德目に付きましては他日御話しする機會があらうと思ひます。餘り長くなりますから是で御免を蒙ります。

人生の話

如是觀

私は曾て或禪宗の寺で、若い坊さんが「如何なるか是れ本條の理」と問ひをかけたに對し、須彌壇上の老僧が「燈籠は丸く柱は四角」と答へたのを聞いて、面白い問答だと深く感じたことがあります。禪宗に於ける所謂問答は一の特色となつて居るのでありますが、禪語には斯種のものが多くありまして、「柳は綠、花は紅」「山に凸兀、海は漫々」「松は直く棘は曲れり」「鶴は長く鴨は短かし」など、皆簡潔の語を以て、佛法とか大道とかいふ大きな問題に解釋を與へて居るのであります。これは宇宙自然の當相が其のまゝ佛法であるの道理を示したものでありますが、實際、天地間のことは、それがあるがまゝに、當り前のことが當り前に解ればよいので、學問といひ知識といふも別に不自然なものを新奇に作り出すといふのでない。要はたゞ謂ゆる如是のことを如是に觀るといふのに在るのであります。されば、彼のコロンブスが亞米利加を發見したといふのも、其時新に亞米利加が出來たのではなく、從來當り前に在つたのを在るがまゝに之を見出したといふ當り前のことでありまするし、又ワットが蒸氣力を發明したといふのも、ワットが世に出でゝ始めて蒸氣の力が現れたのではない。ワット生れずと雖

も、ワツト死すと雖も、そんなことには何の關係も無く、何時でも湯氣の力は鐵瓶の蓋を持ち上げるのが當り前の事實で、ワツトは其力を當り前に見得たといふまでの事であります。

所が此の當り前のことが、却々當り前に解らぬので、人は常にあるがまゝを曲げ勝ちで而も自から知らずに居るのであります。人が若し自分を當り前に解し、他人を當り前に知り、國家社會、天地自然、すべてそれがあるまゝに解釋し取扱つて行くならば、其處に始めて人生の意義も生じ、生存の價値もあることになるので、知識の涵養、人格の修養といふも、すべて如是のことを如是に知悉し體得するといふに外ならぬのであります。此の意味に於て吾々が人生に處して如何に當り前のことを當り前に見るべきか、如何に如是のことを如是に行はねばならぬか、以下少しく考へて見たいと思ふのであります。

萬物の靈長たる所以

先づ吾々人間が何であるかの問題、これをどう見るのが當り前に見ることであるかを考へね

ばなりません。誰でもよく云ふことで、人は萬物の靈長だと威張つて居るが、人々果してよく其の靈長たる所以を當り前に見得て居るかどうか、抑も萬物の靈長などと威張る人間が、他の動物に比べて見て、どれだけの差異があるか。或者は他の動物は羽毛を被つて居るが人間には無い、是れ人間が獨り優秀なる特徴であるといふ。併しながら顯微鏡を持つて見まするならば、吾々人間とて矢張り全身に毛が生えて居るのであるから、これを以て人が他動物に異なる唯一の特徴とすることは出來ません。また或者は言語の有無を以てせんとするが、動物の鳴聲などは吾々に解らぬだけで、彼等同士の間では立派に思想發表の言語を做すものであれば、之も人間唯一の特徴とすることは出來ません。或はまた笑ひの有無を擧げるものもあるが、これも言語と同じことで吾々に解らぬだけであります。又或者の如きは、其の顏面の突出の角度を以て區別し、人間は八十度で犬は六十度であるなどと言つて居りますが、人間でも亞弗利加の野蠻人などになれば七十度位の者もあるといふから、これも以て特徴とすることは出來ません。また一說を爲すものあつて、知情意の心の働きは人間の特有で、他の動物はこれを有つて居ら

ぬといふ。併しながら、犬や猫が常に食餌を貰ふ人、可愛がる人はよく覺えてゐて馴れ懷くことを見ましても動物にも相當の智慧の働きがあることが見られますし、また燒野の雉子夜の鶴、子を思ふ親心は動物も同じで、矢張り情を有つて居らぬとは云はれません。また彼等にも己れ爲さんと欲する事は、必ず成し遂げんとする意志あることは、亦否定出來ない事であります。して見ますれば、動物と吾々人間とどれだけの差異があるか。萬物の靈長と威張れる點は何處にあるか。是等の比較によつて見れば人と動物と相距る甚だ遠からざるものと謂はねばなりません。が、是等の外、唯一つ人間が他動物に優秀なる特徴は私は、人が自己の存在を知る處に在ると言ひたいのであります。人として自分は何であるか、自己の存在は何を意味するか。自己の生存は如何にすべきものであるか、自からこれを明かに知るといふ所に、謂ふ所の萬物の靈長たる特徴が在ると思ふのであります。

滄海の一粟

自分の何ものたるかを知るといふ、其の自分はと見るなれば、身の丈平均男は五尺二寸、女は四尺五寸、其の重量は平均男十四貫五百目、女十二貫八百目に過ぎない。斯くの如き人類が此の地球上に生存する其數、十六億と稱せられて居る。十六億といへば非常に大數のやうでありますが、地球は此等大數の人間を載せ、外に無數の他の動物を住はせ、尙ほ山野海洋の廣き空所を存して綽々として餘裕あるものであります。試みに地球の周圍幾何かと見るならば、假りに一時間二十哩を走る汽車を以てするならば、これを一周するに五十日を要する。若し蟻の歩みを以てするならば、八十六年十ケ月を費さねばならぬことになるのであります。而して地球から月への距離はと云へば、同じく一時間二十哩の速力で五百日を要し、更に地球から太陽へは同じ速力を以てして五百年かゝるといふ。實に地球と太陽との間は非常に遠いものであります。然るに此の非常な遠距離を僅に八分十秒で來るものがある。卽ち光りであります。所が其光によつて吾々が認め得る所の天體無數の星は一々皆世界であるといふが、其中には五百年前に光を發して今日始めて吾々の眼に映ずるものもあり、中には二千年前に出たのが今に至つ

て下界に見えるといふのもあるといふことであります。されば、神武天皇始めて大和の橿原に都を奠め給ひし時に當つてピカリと光を發した星が、人皇百二十三代、紀元二千五百七十餘年の大正の今日に至つて始めて吾々の眼に見え出したといふ如き、非常に遠い遠い所に在るものがあるかも知れません。斯くの如き遠近の諸星、其數凡そ五千七百と稱せられて居る。是等のすべてを包容せる宇宙は實に驚くべき廣大なものではありませんか。

斯くの如き廣大無邊の間に、五尺にして十四貫の身體を有する人間が、眼を睜り肩を張つて自から萬物の靈長などと稱して居る、寧ろ滑稽なものではありませんか。ダーウインとウオーレースの唱へたもので殆ど動かすべからざる學說とせられて居る進化論によるときは、人間が此の地球に生存するやうになつたのは凡そ二十五萬年以前からである。而も人間とまで進化しなかつた前は猿のやうなものであつた。もつと前は蛙のやうなものであつた。其前は芋蟲のやうなもので、更にその前その前と究めて行くならば、炭素と水素との化合物たる單細胞に過ぎなかつた。更に此の地球とても、其の最初は星雲といつて、霧や雲の一群に過ぎなかつたのが、

太陽から熱を貰つて段々萬物の成生する此の地球となつたのだといふ。吾々の今日あるまでの過去は實に無限に遠いもので、今日以後の未來も亦想像の出來ない無限なものであります。宇宙自然はまことに空間的にも時間的にも無限大と謂はねばなりません。而して斯の無限大の時間空間に處する人の身はといふならば、人生五十、七十は古來稀なりと謂はれ、或は無常恃み難く朝の紅顏忽焉として夕の白骨となる。若し宇宙の廣大よりすれば人身は眞に滄海の一粟にも及ばず、天地の悠久よりすれば人生まことに蜉蝣の朝夕といふも愚であります。

果敢なき人生

人身の微なること實に斯くの如く、人生の果敢なきこと實に斯くの如くである。佛が「少水の魚の如くこゝに何の樂みかあらん」と說かれたのは慥に一面の眞理であります。而も未だ其生を知らず焉ぞ其死を知らんやで、人は自から生前を知らず死後に暗く、現在の何たるかも亦明めずして「盧から盧に移る五十年」空々として始め呱々の聲を產婆の手に上ぐるより、終

り坊さんの一喝に引導を渡されて我生こゝに消え去る。人は生きんが爲に食ふと云ひ、食はんが爲に働くといひ、日夜營々として且つ働き且つ食ふ。其の營々は畢竟空々に歸する所以に外ならぬ。人生若し斯くの如きのみとすれば、まことに果敢無き人生、價値無き人生、意義無き人生と謂はねばなりません。

人生に就いて面白いのは洋行歸りの人に聞いた Every man（何人も）といふ宗教劇であります。筋は最初先づ一人の青年が舞臺に出で、次いで太鼓を持つた骸骨が現れる。而して其の太鼓を一つドンと擊つとき、人の命は無くなるとせられてある。所が今其の青年は一時間後には其の太鼓を敲かれねばならぬと宣告された。さア青年の哀愁は一通りでない。血氣に逸り活潑に跳ね廻つでゐたのが急に悄然として沈痛懊惱の態、目も當てられぬ。それはさうでせう。如何なる人でも一時間後に死ぬと極つたら平氣では居られますまい。舞臺の正面には時計が懸つてゐてチツクタツク容赦なく一秒二秒と刻み、三分五分十分と進む。忽ち一人の友が出て來て、グツタリと頽れて考へに沈んで居る青年の肩をたゝき、「オイ君お目出度う、君が豫ねて提

出してあつた論文が及第して愈々君は名譽の學位を授けられることになつた。二十五歳にして博士、君！　喜び給へ」と吾がことのやうに喜んで友はお祝ひをいふ。が此の青年は今そんなことどころぢやない、「學位！　名譽！　あゝ吾に於いて何かあらん。おゝ餘す所四十五分に過ぎぬ」と、尙も深く憂愁に沈む。友は「ハテ變だぞ、氣でも狂つたのぢやないか」と思ひながら默つて行つてしまふ。次に出て來たのが肥滿した一人の老人で、これも亦青年の肩を敲いて、「おゝ幸福な者よ、お前は叔父の遺產全部を貰ふことになつた。明日からお前は百萬長者だ」と言ふ。而も青年の顏には愁ひの雲が重なるばかりで、「百萬の富も吾に於て何かせん。もう後は二十五分、さうして居る間におゝもう十八分しかない」と獨言のやうにいつて居る。此の老人も不審な面持で往つてしまふ。次に出て來たのが、これは嬋妍窈窕たる花の美人である。青年の手を執つて慇懃にいふ、「貴郎！　喜んで下さい、私達の結婚もいよ〳〵兩親の承諾を得ました。明日にも嬉しい式が擧げられますよ」青年は執られた手を振り拂ひ顏をそむけて「戀が何だ！　おゝ最早殘す所僅に八分！」美人は意外な戀人の態度に呆氣に取られ、果て

は無情にも吾を見捨てたのだと怨み喞ちつゝ彼方に退く。其中に時計は五分となり三分となり一分となつて遂にドンと太鼓が鳴つて幕が下りる。といふ筋であります。人は富を追求し、名譽を憧憬し、戀に焦れて恰も渴したる鹿の陽炎を逐ふが如く狂奔して居るが、すべてが死の前に於てたゞ夢幻泡影に過ぎざること丁度此の一場の劇の如きものであります。此劇は一時間、吾生は五十年、此の一時間劇は正に人生の縮圖であります。而も吾々は一目瞭然此の縮圖を見るが如く、吾々の現在五十年を知らずに夢のやうに空しく渡つて居る。二十歳にして戀を思ひ三十歳にして名を思ひ、營々齷齪として泡影の如き塵埃の如き戀や名譽や富を爭ふ餓鬼となつて狂ひ廻り、而して死の一字を以てすべてを一筆に拘斷されて了ふのであります。まことに淺墓なことではありませんか。人これを思はずんば則ち止む、苟も一たび思うてこゝに至ると き、何人か痛切に感悟する所無きを得よう。宇宙は廣大である。天地は悠久である。而も天地人の三才と謂ふではないか。人と天地との交渉や如何。吾々は此の夢幻の如き世に徒らに夢幻の如く生滅し去つてはならぬ。電光石火の人生によく常住無限の生命を續けねばならぬ。斯う

考へて見れば一刻も安閑としては居られない筈で、其處に人の人たる道を見出さねばならぬ、其處に萬物の靈長たる所以を發揮せねばならぬといふことになるのであります。

人の道

人は活きんが爲に日夜營々として働くといふ、卽ち生命を存續せんが爲に働いて居るのであります。生命の人に於けるや最も大切なものであるに相違ありません。併しながら其の生命は死の一字を以て抹殺されてしまふのだとすれば、たゞに果敢なき生命を護持するといふことだけでは他の動物と何の撰ぶ所はないことになるので、それが萬物の靈長たる人の道であるとは謂はれません。萬物に秀でゝ三才に天地の間に與かるといふ人間の道は、單に生の爲ならず死の爲ならず、況んや富名譽戀などの爲ならざるもの、古今を通じ東西に渉る一貫の大道でなければなりません。古歌に「梁傳ふ鼠の道も道なれど、道てふ道は人の履む道」とありますが、然らばその人の履む道とは何でありませう。先帝陛下が軍人に下し賜ひし勅諭には、

只一途に己れが本分の忠節を守り、義は山嶽よりも重く、死は鴻毛よりも輕しと覺悟せよ。其操を破り、不覺を取り汚名を受くる勿れ。

と仰せられてあります。是れまことに我が軍人たるものゝ道でありまして、同時は吾々國民としての道でなければなりません。たゞ一途に己れの本分を守る、是れ人の道であります。而して義は山嶽の重きに致し、死は鴻毛の輕きに比す。實に貴き生命よりも更に貴きものは斯の人の道であるのであります。

また支那の鳥窠禪師は白樂天の「佛法の大意は如何」と問うたに對し、「諸惡莫作。衆善奉行。自淨其意。是諸佛敎」と謂つた。誠に簡明にして要を得た答でありまして、すべての惡いことは爲るな、すべての善い事はせよ。それが卽ち佛法ぢや、といふのであります。人の道といふも、要するに惡は爲す勿れ善を行へといふに外ならぬのであります。惡いことをするな善いことをせよ。之は解りきつたことでありますが、さてそれならば、何が善で何が惡であるか、といふことになりますると甚だ漠然としてゐて云ひ表し難いやうになるのです。善の反對は惡、

惡の反對は善で、善惡相對、循環論法で何處まで行つても盡きることはありません。例へば人を救ひ助けるといふのは善い事である、誰も異議を挿むものはありますまい。所が是に巡査に捕まつた盜賊が獄舍に投ぜられて居るのを見て、これは可哀さうだ窮屈であらうと、これを助け救ひ出して遣つたら如何でせう、それでも人を助け救ふことは善なりと謂はれませうか。また人を斬ることは惡事であるとは誰も異論はありますまい。けれども醫者は腫物に刀を加へて人の體を切るではありませんか。更に戰場では人を斬ること草の如しなど謂ふではありませんか。古歌に「善しと見るおのが心をなにはえの、葦かるかたにうつさずもがな」とあります。此處に善しといふもの彼處には惡しといふ難波の蘆は伊勢の濱荻、所變れば品かはる。轉變定まりなき世の中には時と場合で善ともなり惡ともなることが多くあるので、人に向つて兩手の母指を示し舌を出すことが西藏では禮式になつて居るが、我國ではそんなことをすれば無禮になりませう。また西洋の握手の如きも、彼の國では常習で何でもないことであるが、我國の青年男女の間に行へば飛んでもない間違ひが起るでありませう。善惡の標準は實に一定の型に嵌

め難いものであると謂はねばなりません。

善惡の判斷

是に於て、善とは何、惡とは何の判斷には吾々甚だ迷はざるを得ないのであります。倫理學上では、其の行爲の動機によりて善惡の判斷を下す、所謂動機論といふのがあり、また主として其の結果を見て善惡を判斷する所謂結果論といふのがあつて、或は最大多數の最大幸福を圖ることが善であつて、其の反對は卽ち惡であるといふ幸福說を唱へるのもあり、或は何でも爲になる、利益になるべき行爲が善であるといふ功利說を立てたり、或はまた快樂滿足を得べき行爲が善であるといふ快樂說を爲すものもあつて、いろ〳〵と善惡の標準に就いて爭つて居ります。而して其の標準を定めるものは云ふまでもなく心の働きであるが、その働きは吾々の經驗の知識に依つて築き上げられたものだとするのが經驗派の倫理說、其の能力は先天的に吾々の內面に在るもので、事每に無條件的にサツ〳〵と善惡を判斷するのだといふのが直覺派の倫

理說。更にその道德判斷の能力が理智に基づくものだといふのが理性派、それが感情に屬するもので、つまり德は知るべきもので無く感ずべきものであるとするのが感情派の倫理說であります。

何れにしましても、善惡判斷の標準を定めるのは心を措いて外には無いのであります。が、さて其心といふ奴が甚だ賴りないもので、「心こそ心迷はす心なれ心にこゝろ心ゆるすな」と古歌にある如く、始めも涯も白雲の、怪しく移り行くものは實に人の心であります。同じ月を觀ましても「此世をば我世とぞ思ふ望月の虧けたることも無しと思へば」と獨り滿悅して居る人もあれば、「月見れば千々に物こそ悲けれ我身一つの秋にはあらねど」と悲んだ人もある。見る人の心々にまかせて、高根に淸く澄める月は一樣に下界を照らすのであるが、見る人の心は千差萬別であります。見ることの出來ない盲人はまた「花ならば探りても見む今日の月」と悲歎の心を歌ひ、妻は「明月や坐頭の妻の泣く夜かな」と同情の涙を流して居る。年々花笑ひ鳥謳ふ春は來れども、去年歡樂の心を以て見た人は今年哀愁を惹くの媒として眺めるものもある。

「明年東郊尋レ春路。誰復挈レ瓢趁レ爺來」の如き、花の滿開を見て亡き娘を思ふ詩人の述懐であります。斯樣に萬人萬樣で而も變轉常無き心に訴へて善惡を判斷するということは甚だ覺束ないことであります。之に就いて西洋に面白い話があります。或紳士が新調のズボンを着けて出かけましたが、どうも長過ぎるので二寸ばかり縮めたいと思つて、家に歸つて來ると直ぐに其事を細君に話しました。所が其時、細君は何か不平なことでもあつたのか、そんなことは妹にさせたがよいと一言に撥ねつけた。妹に賴むと妹も何か不機嫌なことがあつたと見えて、それは娘に言ひつけたらよいでせうと同じく引き受けなかつた。娘に言ひつけると、母も叔母も承知しないのを私がしては惡いでせうと亦斷つてしまつた。其のまゝ皆寢てしまつたのですが、細君はさて考へて見ればどうも濟まないやうな氣がしてならぬので、コツソリ起きてズボンを取り下して來て二寸縮めて元の處にかけて寢ました。すると妹も同じ考へでソツと起きて來て、細君が既に二寸縮めたとも知らずに又二寸縮めて元の通りに置いて寢ました。次に娘も亦同じ考へでコツソリ起きて來て同じやうに二寸縮めて、これで善しと再び寢に就き

ました。これで其のズボンは丁度六寸縮められた譯であります。紳士が翌朝穿いた時には殆ど半ズボンになつてゐたのに大に驚いたといふことであります。變轉常なき心を本とする人の行爲は往々にして斯くの如き愚を演ずるのであります。されば善意でしたことも飛んだ惡結果を招いたり、偶然の動機が思ひがけない善の結果を見たりすることは、吾々の實生活に於て屢々見る所であります。即ち吾々の移り易き心を本とする判斷は、善惡の標準を定むるに於て正確を得難いものと謂はねばなりません。

智慧の鏡

そこで善惡を判斷するには、此の移り易き妄動の心をうち捨てゝ、智慧の鏡を磨いて物事を正しく照らして正邪善惡を明かに辨判して行かねばなりません。それにはどうするかといふと、必ず實驗によつて磨かねばなりません。彼の迷信なるものは實驗に合はぬもので、一たび知識の實驗に逢へば丁度光明の前の暗黑の如く消滅するものであります。併しながら其の實

地經驗といふことも必ずしも眞理とすることの出來ない場合があります。よくいふ昔話であります、飛彈の高山の人と伊豆の大島の人とが江戸見物に出て來て同じ宿屋に落ち合つた。種々世間話をして居るうちに端なく大議論を始めて互に口角泡を飛ばして相下らぬ。大島の人は太陽は海より出でて海に入るのだといひ、高山の人はいや太陽は山から出て山に入ると主張し、「それはお前が違ふ私は五十年から大島に住んで居るが一日も山から出て太陽を見たことがない」「馬鹿な、俺だつてもう六十年近くも高山に居て毎日太陽が山から出て山に入ることは實地に見た間違ひ無いことである」と、如何しても治まりがつかぬ。すると宿屋の小僧が仲裁に入つて「お客さん方、それは何方も違ひます。お日樣は屋根から出て屋根に入るものです。嘘だと思ふなら明日の朝早く起きて實地に御覽なされ」と言つたといふ、滑稽な作り噺でありますが、人各々境遇地位を異にして居れば、從つて其の經驗も同じでなく、往々此類の誤謬を免れぬものであります。そこで正しき智慧の鏡を輝かすには、どうしても進歩した學問によらねばなりません。學理の研究と實地の經驗と相俟つて始めて正知正見を得らるべきであります。然らば誤りなき正知正見を以て此の人生を觀、自己を觀たならばどうなるであらう。どう見るのが當り前の在るがまゝの眞相で、如何するのが吾々の當り前の務めでありませう。

何時もよく申しますが如何なる偉人豪傑でも、此世に一本立ちでは通れない。上下貴賤の差別こそあれ、何人も皆互に持ちつ持たれつして衣食住を得て居るのが、人生社會の眞相であります。故に彼に持たれつならば吾は持ちつでなければならぬ。若し相互共同の此の生活に於て何等爲すなく空しく其日を送る者があらば、そは寄生的生活である。宿屋に泊つて無錢飲食、食ひ逃げする如きものであると謂はねばなりません。昔支那の百丈大智禪師は「一日作さざれば一日食はず」と言はれましたが、今の世には一日作さずして三日も五日も徒食して居る輩がある、寔に沙汰の限りと謂はねばなりません。吾々の住ふ家を見るに多くの柱と多くの梁とで組み立てられた居る。私共の社會も、それの如く互に柱となり互に梁となつて居るのであります。柱に長短あり梁に大小ある如く、私共の社會にも地位境遇に貴賤上下の差別はある。併しながら梁の小なる故を以て棄てられず、柱の短かきが故に除かれないやうに、人生社會も高

きは高きがまゝ、卑しきは卑しきがまゝに、各々それ〴〵の役目があり、それ〴〵の力を致して居るのであります。故に百姓なり町人なり如何に其の仕事が小であつても、各自たゞ其職、其業に忠實なるのが、直ちに社會全體の幸福を增す所以となるのであります。私共の今日見る文明の花は、無限の過去より多くの人々の經驗に經驗を積み、知識に知識を足して築き上げられたものであります。されば私共も亦此の祖先からの經驗知識を土臺として更に洗練し更に磨き上げた知識の鏡を作り、現在よりもより善き世界を子孫に遺し祖先より受けた此花に立派な實を結ばせねばならぬのであります。

迷妄の曇り

智慧の鏡を磨き耀かして人生の眞相、自己の本務を知るべきことを述べて來ましたが、さて此鏡には兎角迷妄の曇りがかゝり易いので困るのです。「それはさうだ」と道理は解つても「けれども……」といふ癖が人間にはある。これは迷妄の情から來るので、切角磨いた理智の鏡も

これが爲に曇らされてしまふ。昔の情歌に「夢と諦めりや何でもないが其處が凡夫でネー貴方」といふのがあります。此れ全く今の「けれども」を具體的に言ひ表したもので、「これまでの緣だ、夢と諦めよう」と道理は一應呑み込んだが、「けれども……其處が凡夫で……」と「けれども」で昧ましてしまふ。誠に惡い癖であります。もう一つ惡い癖は、人は兎角他人のことがよく見えて自分がつまらないやうに思はれる、といふ癖であります。籠の鳥と野の鳥との問答したといふ面白い話があります。籠の鳥が野の鳥にいふ、「あゝ羨ましいことだ。君等は廣い天地に翱翔して何等拘束も無く自由に樂しく遊び廻ることが出來る。僕等はつまらない、方尺のうちに囚れて僅に飛べば頭を撲ち躍れば腰を打つ、ほんとに君が羨ましい」野の鳥はまた同じ嘆聲を漏らす、「お前こそ羨ましい身の上だ、俺などは野に下りて食を漁るに五歩に一啄十歩に一飲、終日飽くことを得ず、或は獵師獵犬に狙はれ、或は鷹隼に襲はれ、安き心もない。お前などは斯の恐れもなく、居ながらにして口珍味に飽いて居る、ほんとに羨ましいことだ」と、互に其身を不幸とし他を幸福と見て居る。人も此鳥の如く、俗にいふ「癩病の梅毒

羨み」で、迷へば誰でも自分がつまらなくて他人が善く見えるものであります。是れ皆自己を諦かに徹見するの明無く、徒らに迷妄の情を馳せるが爲で、人は須らく獨立の自己を守つて、自分の信ずるところは誰が何といはうと敢然として猛進するの氣力が無くてはならぬ。英雄は瀑布の如し、吾が進むところ何ぞ之を妨ぐるのアルプス山あらんや。人この世に處するまさに斯の意氣が無くてはなりません。斯の意義を以て猛然として進むには、吾は吾たり彼は彼たり。吾が守る所の面目は曾て彼に冒さるゝなく、他の地位境遇はさもあらばあれ吾何ぞ之を羨まん、といふ確乎不動の自信ある者でなければなりません。所が此處に一つ注意を要することは「物事は一つ叶へばまた二つ三つ四つ五つ六つかしの世や」で、人の希望には際限の無いものでありますから、意氣にまかせ前進たゞ前進するばかりでは遂に滿足安心の境地を得ることが出來ません。何處まで行つても常に不平不滿で安心の出來ないのは不幸な人と謂はねばなりませい。

諦め主義

そこで古人には諦め主義といふ消極的な教へを說いたものがあります。それによりますと、吾々は美衣美食に飽滿したい、併しそれは贅澤だマア諦めよ。自分は天下の大學者若くは大政治家、大宗教家、大教育家、天下一流の大人物になりたい。併しそれは出來ない非望といふもの勉强も大概なところで諦めるがよい。斯ういふ風に何でも諦めよ諦めよで不平不滿を抑へようといふのであります。進め〳〵でたゞ前進のみを焦るのは兩足を一度に蹈み出さうとする如きものならば、此の諦めよ諦めよといふ方は兩足をピタリと停めてしまふやうなものである。兩足を一度に進める者は蹉跌轉倒を免れず。兩足を停むる者の遂に目的地に達するの期なきが如く、此の二者は積極消極の兩極端で共に正しき道とすることは出來ません。人は矢張り左足を出せば右足は止まり、右足出づれば左足は止まるといふ風に一歩一歩前進する健全な中庸の道を擇ばねばなりません。卽ち進むべきに當つては奮然猛然として進み、諦めるべき

に逢うてはサラリツと諦めて顧みないといふやうに爲たいものであります。

昔、支那に孟敏と言ふ人がありました。或時、甑を肩にして市に出づる道すがら、過つて取り落し之を壞してしまつた。然るに彼は其のまゝ振向きもしないで、サツサと行つてしまつたといふことであります。壞れたものを取り上げて割れ目を合はせて見たりしたからとて元に直るものではない。割れてしまつたものはそれまでの事、仕方がないと諦めたのは、たしかに達觀の士と謂ふべきでありませう。また瑞典のカール十二世は賢明で勇敢な君主でありましたが、或時陣中で祕書官に手紙を書かしてゐる所へ、突然敵軍から打ち出した砲丸が飛んで來て、傍らに落ちて轟然として破裂しました。祕書官は驚いて立上り「陛下砲彈が」といふと、カールは平然として「砲彈と書簡と何の關係がある」と少しも動ぜる景色は無かつたといふことであります。不意に飛び來る砲彈は如何に驚き騒いだとて避けられるものではない、と諦めて平然たりしカール十二世の覺悟は、其の場合甚だ立派なものではありませんか。また我國の伊達政宗は、太閤から拜領の茶碗を過つて取り落し破壞したとき、覺えず動悸を感じたので、自

分は奥羽八十萬石の主でありながら、太閤の威に畏るゝこと斯くの如く甚しいのは猶修養が足らぬと深く考へたといふことであります。是等の偉人は徒らに往事を逐はず、更に將來の進歩を考へたもので、諦め主義の上乘なるものであります。

和して同ぜず

諦めるばかりで消極的に停止してしまふのは宜しくない。右足と左足とを交互に出して歩を進める如くせねばならぬとは前にも言ひましたが、古語に「君子自彊不息」とあるは即ち此の意味で、之を稱して秩序的進歩といふのであります。今の無暗に成功を急ぐ連中は、急行列車顚覆主義とでも名づくべきか、其終りを完うすることが出來ないものであります。

屢々申す通り、人といふ文字がノと人と互に持ちつ持たれつして居る如く、人は互に同情を以て相助け相惠んで行かねばならぬのでありますが、人の性情には種々あつて、此の同情を注ぐ上に於ても一樣ではありません。大體人は四種に分つことが出來ます。第一は自から守る所

なく人と調和しない人。第二は自から守る所なく而も人と調和する人、操守固からざる所謂ゼンマイ議員の如きは此種に入るものであります。第三は自から守る所頗る固く決して人と調和せぬ人。第四は自から守る所あり而してよく人と調和の出來る人。此の第四種の人にして始めて世に立つて事を爲し得べきであります。論語に「君子は和して同ぜず」とあるのが即ち此の謂で、たとへば三曲合奏で音調がシツクリと合うて一つになるのが和するといふので、而も尺八は尺八の音、琴は琴、三味は三味で各々別々に獨特の聲音を出して居るといふのが同ぜずといふのであります。君子人は自己の操守堅固であるから決して小人の如く他に阿附雷同することは無い。而も大同情を有つてゐて誰とでもよく調和してゆく、恰も合奏で種々の樂器が其音は別々であるが其調を一にして人の心腸を悅ばしむるやうなものであります。

常陸國鹿島神社に一の額がかゝつて居ますが、其の文句は頗る今いふ和して同ぜずの意和を明かにするに好資料となるものと考へます。それは「五五十也。二八十也。一九十也」といふのでありまして、同じ十の數でも五と五でも善し二と八とでも善し一と九でも善いので、人間

は其の性質賢愚千差萬別であるから、彼方が幸に五ならば此方も五を持つて行けば善いのでありますが、若し先方が二とか一とかの人ならば此方は八とか九の同情と親切を持つて行かねば調和が出來ぬのであります。されば人は此の社會に處して樂しい共同生活を爲さんとするには、常に自から愼むこと秋霜の如く、而して人に對しては春風の如くにするといふのが肝要であります。それには一の誠が根本になければなりません。中庸に「誠は天の道なり、之を誠にするは人の道なり」といひ、これを解釋して「誠は表裏無き心なり」と言つてある如く、どうしても誠でなければ人を動かすことは出來ぬものであります。たゞ表裏無く、心と口と一致し、口と行ひと一致して、正しく自己の本務を盡す所に人生の意義あり、人としての價値も存するのであります。

惟へば、私共が一日々々と此世を過して行くのは、丁度白紙の上にピタリ〳〵と印形を押して行くやうなものであります。よし私共の此の身體は死亡しても、此の印形は永久に消滅するものではありません。吾々の日常生活は實に貴い意義あるものであります。人々深くこ

れを思ひ、寄生的生活、食逃的生活をして此の貴い生命、此の價値ある一日を空しく消し去るやうなことなく、各々進んで此世を一層進歩せしめ、五十年の立派な痕跡を永久に印し、來るべき子孫の代に、より善き世界を遺すやうに力めねばなりませぬ。それが私共の責任で、萬物の靈長たる人間の當り前に爲すべきことなのであります。

成功の話

自力か天運か

世の中の成功した人の話を聞きますと、何れも悉く自分の力で成功したやうなことを言つて居ります。また失敗した人の話を聞きますと、それは自分の力では如何することも出來ない所の運命の力に支配されて思ふやうに事業が出來なかつた。即ちどうも運が惡い爲に失敗したのだと申します。果して成功といふものが自分の力のみで得られるものでありませうか、果して

失敗といふことが自分の力では如何ともすることの出來ぬ自分以外の運の力のみによつて招致されるものでありませうか。假りに此處に所謂成功の人があつて百萬圓の富を一代に作り上げたとしたら、其の成功は全然自分の力のみによるものか、それとも自分以外の種々の條件で周圍に其の原因があつたのではあるまいか、仔細に調べて見ねばなりません。自分以外の周圍の力としてどんな條件が數へられるかといふと、先づ其の人の生れた時代が良かつたといふ場合もあるし、また其の生れた土地が善かつた爲もあるし、それから幾度も好機會に出逢つたからだといふやうなことも考へられる。例へば生れて明治維新の際に世に立ち時勢の變轉で忽ち乘ずべき機運を得たのは自分以外の力と謂はねばならず、また薩摩とか長州に生れた爲に生れながらに成功の土臺に立つて居たと謂はれるではないかとも考へられるし、或はそれが更に西南の役若くは日清日露の兩役に際して圖らざる大儲けが出來たのだといふやうなこと、また其人には先輩の多大なる手引があつたのだといふやうなこと、是等種々の條件を數へ上げて來るならば、其人の贏ち得たといふ百萬圓から先づ其の生れた時代の力が十萬圓、其の生れた土地

が十萬圓、西南の役で十五萬圓、日清の役で二十萬圓、日露の役で二十五萬圓といふ風に、引く、さうして考へて見れば彼自身の力は剩すところ幾何も無くなる。更にそれには彼を引き立てた先輩の力が十萬圓、彼を助けた細君の力が十萬圓と差し引くならば其人の成功は全然他の力によるもので、自分の力は零といふことになる。若し更に親の遺産が多少でもあつたとすれば、其人自身の力は零どころでないマイナスになる譯であります。これは極端な例のやうでありますが、人の成功といふことには自分以外の力の大なるものあることを看過することは出來ないのであります。それならば失敗者の言ふ通り、自分の力は全然運命の力に壓倒せられて、何でも運次第で定まるものでありませうか。誰でも事を仕損じた後で、アレは彼樣ではなかつた、あの時斯樣すれば善かつたのだと云ふ悔悟の念の起らぬはない。また岡目八目で、第三者から見れば人の成敗の跡が歴然と解るもので、あれは斯うであつた。斯うすれば必ず成功したものを……と批判が下される。此の自から後悔すること、他から批判を下されること、それが卽ち人の事業は單に運次第で無いといふ反證で、事の成敗に就いては自己以外の力、卽ち諸

種の周圍の條件の外に大なる自分の力あることを認めない譯には行かないのであります。

若し人が、自分以外の力にのみ支配せられて、それらの拘束から一歩も自分の力を展ばすことが出來ないとしたならば、全く他の動物と何等異なる所はないので、人の人たる所以を見出すことは遂に出來ない譯であります。勿論人には遺傳の力とか家族の狀態とか、地理風土の影響や、時代變轉の形勢や、諸々の自己以外の力あつて、自己を支配することの多大なるものあるは否定することの出來ない事實でありますが、それと同時に、人にはそれらの支配拘束から免れんとする努力、それら種々の條件を利用し、若くはこれに打克つところの强い力があるものだといふことも亦認めなければならぬ事實であります。現代文明の由つて來る所を觀ますれば、一に人間が自然を征服し、周圍の諸種の條件を利用し若くは之に打克つて來た賜ならざるは無いのであります。卽ち或意味に於て、人の成功といふことは、自然の力運命の支配に打克つの謂で、多く外圍の力に打克つたものは大きく成功し、多く運命の支配に任せた者は大きく失敗するのであると言ふことが出來ると思ふのであります。

運命論といふことになりますれば別に詳しく諸方面から觀察し説明を加へなければなりません。併しながらそれら高尚な理論は他日に讓ることにしまして、茲にはたゞ吾々が成功といふことに就いて、或點まで吾々自分の力で出來るといふ考へを立場として、如何なることが成功の原因となるべきか、以下それらを數へ出して述べて見ませう。

明察の知見

一　明かに自己を知れ

如何なる者が成功するか、如何なる者が失敗するかの第一條件は、明察の知見が有るか無いかといふことであります。明察の知見と一口に申します中にも種々ありますが、先づ第一は自分の價値を明かに知る人は成功するし、自分の價値を知らぬ者は失敗するといふことが言はれます。其の自分の價値を知らぬものにも、二通りあつて、餘りに自己を小さく見る者、及び其の反對の餘り自己を大きく見る者、此の兩者は共に自己の價値を正しく知るの明を缺いて居る

ものであります。精神病者に微小妄想狂と誇大妄想狂といふのがありますが、健全な精神狀態に在る人にも此の二種の傾向はあるので、たゞ其の程度が精神病者ほど極端でないといふまでであります。自分を餘り小さく見るのは、迚も覺束ない駄目だと、自分を見くびつて、有る力も出さないのであるから成功は望むべくもないし、また自分の相當な價値を越えて無暗に大きく自分を買ひかぶる者は、無い力を無理に出さうとするので失敗を免れないのであります。どちらが優しかといへば、まだ自分を大きく見る方より、小さく見る方が比較的優しであります。どう。何故かと云へば自分を小さく見て居る者は、どうかするとこれではならぬと奮發することもあるが、大きく自分を買被つた者は、到るところ不平失望の絶ゆることなく、失敗することが多いやうであります。

よくあることですが、會社員なり店員が、どうも自分の才能技倆が社なり、店に於て充分認められないと云つて不平を起し、憤然として其處を飛び出す。飛び出して見て彼處此處と勤めて見るが何處へ往つても不平はいよ〳〵甚しい、またしては飛び出して居る間に何處でも使ひ

人が無くなつて、自から誇りとして居た技倆才能も遂に人の一顧に價せぬやうになる。斯くの如きは自から買被つた不明の罪で、如何なる才能も世に立つては自分一本立ちで揮ふことは出來るものでなく、會社なり店なりが背景となつて始めて其處に自分の技倆が實地に現れるものだといふことを知らないからであります。彼の淀君が、太閤在世の時は天下の英雄も彼女が一顰一笑によりて左右せらるゝかの如く見えたので、太閤歿後も同じやうに自分の自由になるものと心得て遂にあの失敗を招いた。それは自分の後には太閤といふ大きな背景があつた爲であつたのを、淀君自身の力の如く買被つたものと謂ふべきであります。

餘りに自分を買被るものは、常に斯くの如く多くは失敗に終るのであります。而して其の反對の餘り自分を小さく見る方は、比較的優しだとは云つたが、勿論自分は獣目だと見くびつて居たのでは何事も成功は出來ない。人々境遇により時に極めて小さな仕事をせねばならぬ場合もあるが、小さきことは小さいなりに、卑い境遇は卑いなりに、自己の力を正當に考へ、自分の仕事に最善を盡して行くところに着々成功の實を擧ぐべきであります。秀吉が信長の處に

往つた初めは草履取りであつた。而もよく草履取りとしての最善を盡した。次第に登用されて足輕となれば足輕としての最善を盡し、士分となれば士分としての最善を盡し、遂にあの成功を收め得た。其小に處して自から小にせず、大に在つて大に誇らず、不平も無く悲觀もせず、自暴自棄することなく、着實に其力を致して一歩々々成功の梯子を登つて行つた態度は、吾々の大に學ばねばならぬところであります。

二　明かに他を知れ

明察の知見といふ上には、自分を明かに知ると同時に、また他を正しく察するといふことが必要であります。毎々申す通り此の社會は共同生活で、世の中の事は何でも一人では出來ない。必ず他と共同でやらねばならぬ。其の共同の事業には先づ其の共同者たる他人を明かに知る必要があります。他人を知るの明を昧ますのは何であるかといふならば、それは愛憎の念であります。昔から人君たる者の其家を失ひ國を亡ぼすもの、大抵みな愛憎の念強くして忠臣の諫言を明察せず、奸臣の佞辯を信じた結果ならざるはない。即ち他を明察することが出來なかつた

爲であります。

私達よく聞くことですが、使ふ人と使はれる人と、各々言ふところが面白い。使はれる人は、どうか眼のある人に使はれたいといふし、また使ふ方の人は、どうか眼の放せる者を雇ひたいといふ。眼のある主人とは、雇人の働き振を明察して少しの愛憎も加へないで、其者の實力と勤惰とを認めて適處に適用するといふのであります。眼の放せる雇人といふのは監督者が見て居らうが居るまいが、與へられたる自己の仕事には最善を盡して、些しも蔭日向無しに働く者をいふので、監督の眼が届かぬ所では直ちに胡麻化して懈けるといふのは眼の放せない雇人で、或人は斯の如き横着者を譬へて螺旋をかけ通しの時計だといつて、螺旋をかけ通しにせねばならぬ。時計は手を放せば忽ち止まる。そんな時計ならば無い方がよい。一寸の間も主人の眼が放せない雇人は丁度この時計のやうなものであります。要は、使はれる者は人を相手にせずに一途に自己の責務を果し、省みて少しく疚しい所無く、自己の良心に滿足するやうに働くといふ所に自分の成功の道は開けるのであるし、また使ふ方は、毫も愛憎の念無く、それぞ

れの長所を利用して十分の才能を盡さしむるといふ風にして、始めて自己の成功に於て多大なる助けが得られるのであります。

三　時を明察せよ

自己を知り他を知るのみならず、更に明察の知見を必要とするは時を知ることであります。時代は益々進んで行く、世は愈々變化して行く。若し能く此の時代の機運を明察する人は成功し得べく、世の變遷に暗くして進歩の形勢に後れる者は失敗者たらざるを得ないのであります。今日、東京の銀座通りに誰もやつて居ないからと云つて行燈株式會社を建てゝ見たらば如何でせう。既にランプの見捨てられたことも久しく、到るところ電燈瓦斯燈の煌々たる今日に於て、誰か行燈株式會社に一顧をだも與へよう、其の成功の望むべからざることは言ふまでもないことであります。何でも時代の要求に伴はざる後れた考へを以てしては到底失敗を免れない。時代後れの考へが甚しければ甚しいだけ、其の失敗も大きいのであります。そこで成功せんとする者は通常皆時代に伴うてやる。併しそれは既に誰かの創造を眞似したもので、大した

失敗はないが、また大なる成功を博することは出來ない。更に一歩進んで時代に先んずるといふことが必要で、時代は如何に變化せんとしつゝあるか、社會の要求は如何に移り行きつゝあるか、明かに趨勢を看取して、新らしい企てを以て新らしい要求に應ずることを爲す、即ち先見の明ある人は、其の成功や大なる實果を收穫するのであります。

私は屢々思ふのであります。彼の維新の際、江戸城明け渡しの當時に於て、何でも再び德川の天下にせねばならぬと、命を鴻毛の輕きに比し、砲火劍戟に訴へて極力奮鬪した人々の忠魂義膽は以て偉とするに足るでありませうが、一面冷靜に時の觀察からするならば、寧ろ其の哨煙閉し砲火閃く裡に在つて、芝の新錢座に靜に英書の講義を續けて居たといふ福澤諭吉先生の先見の明に敬服せざるを得ないのであります。

四　處を明察せよ

時代を知ると同時にまた能く土地の如何を明察するといふことが極めて大事なことで、何事を爲すにしても、其の土地場所の適不適を明かにするとしないとは、まさに成功と失敗との分

岐點と成るものであります。誰か木曾山中に三越のデパートメントストアの如き一大建設を企てゝ以て大なる成功を期し得べしと言ひませう。誰かまた土一升に金一升、見渡す限り萬家の甍を列ぬる東京の眞中に一大農園を作つて、以て大なる成功を望み得べしと思ひませう。人の仕事は皆地面の上を離れたものは無いのであるから、事を作し功を收めんとせば必ず其の土地の關係を明かに考へるといふことが甚だ大切なことであります。平清盛が源頼朝を伊豆の蛭が小島に流した如きは明かに土地に對する明察の知見を缺いたものではありますまいか。由來、關東の地は八幡太郎以來、源氏の恩威に心服して居て源家の爲には謂ゆる坂東武士は身を挺して馬前に死せんとの慨があつた。其の附近の地に源家の嫡流たる頼朝を置いたといふのは、殆ど虎を山に放つに等しいものと謂ふべきでありませう。若しあの時伊豆に流さずして平家の勢力範圍たる中國地方に置いたならば、頼朝いかに英雄なりと雖も生涯殆ど平家を如何ともすることが出來なかつたかも知れない。

斯ういふ風に先づ自己を知り且つ他を知り、また時を知り及び處を知る。是等の諸項は皆是

れ成功の重要條件であります。

用意周到

自分を知り他を知り外圍の事情を明察することの必要を述べて來ましたが、更に成功の鍵を握るべき條件として、小事を忽にせぬといふことが數へられるのであります。極めて小さな事にも常に微細な注意を拂ふといふことが尤も大事なことであります。昔から諸種の發明とか發見とかいふものは皆此の小事を忽にせず、知見がよく行き屆いた結果で無いのはない。一望涯際なき大洋に乘り出して一片の木屑の浮んで居るのを見て其の陸地あることを知り、或は鐵瓶の蓋が湯氣で持ち上がるといふ尋常些事に注意を惹いて、それより遂に蒸氣機關の發明をした如きは、此の小事を忽にせざる所に立脚して成功を收め得た適例であります。

人は常に大きなことには眼を止めるが、小事には得て注意を怠り勝ちである。殊に小事を忽にせざることの成功の必要條件たることを知らないのであります。亞米利加の成功者の一

人にアスターといふ人があります。或人が問うて「貴下は如何してそんなに成功なされたのか、實に運の善い人である」といふとアスターは言つた。「いや世には私より運のよい人がある。好運に乘じ好機會を捉へた人は私の外に世には澤山ある」「それならば貴下の成功は一に大なる努力によるか」「いや世には私よりも、より以上の努力を致した者がある」「それでは如何して貴下は其の成功を博したか」「それは別に祕訣がある譯では無い。私はたゞ常に小事を忽にせず、事毎に微細な注意を怠らなかつたといふまでである」と。小事を忽にせず事毎に微細な注意を怠らぬといふことは、他の語で言へば用意周到といふことであります。如何に先見の明ありと雖も、事を爲すに用意周到を缺いたならば、爲に得らるべき成功も遂に得られなくなるのであります。

臨機の才

さて是等の知見あつて自他大小巨細を明察することが出來れば、それで成功が出來るかとい

ふに更に其智の働きといふものが無くてはならぬ。智の働きとは卽ち臨機應變の才であります。世の中の事は絕えず變轉推移して極り無きものであるから、其の推移の機に臨み、變化に應同して、其時、其處、適くとして可ならざる無く、皆其の宜しきを得て行くといふ才が無くては成功は出來ないのであります。或小學校の先生が生徒に敎へて「いつでも外から歸つたら靜に戸障子を開けて家に入り、親の前に出て靜に兩手を附いてお辭儀をしてから、ものを言ふやうにせねばならぬ」と言つた。これは尤もなことで眞に良い敎訓であります。所が此の敎訓を受けた子供が、或時幼い弟を伴れて川端で遊んで居た時、弟が過つて水の中に墜落した。兄の方は大に驚いて急を父に知らせようと宙を飛ぶが如く息せき切つて家へと駈け戻つたが、駈けながらフト學校の先生の敎へを思ひ出して、家に近づくと俄に步調を緩め、力めて喘ぐ息を靜めて靜に戸を開け靜に障子を開け、そして靜に父の前に出で兩手を支へて靜に口を開き「今弟が川へ落込みました」と報告した。それは大變だ、と父が慌てゝ駈け附けたときは、弟は既に呼べども返らぬ空しき死骸となつて居つた。臨機の才の無い者は往々之に類した愚な失敗

を招くことを免れないのであります。

これは傳說でありますが、柳生但馬守が其子十兵衞の器を試さんとして、或時十兵衞が厠から出て手を洗つて居る隙を狙つて物蔭から突如石礫を打つた。それが非常な勢ひで飛んで來て十兵衞の右の目に中つた。スルと十兵衞はハツと手を以て左の目を押へた。之を見て但馬守は「出かした十兵衞」と褒めて「此者は劍道に於て行末見込があるわい」と心ひそかに悅んだといふことであります。右の目を打たれたならば「痛い！」と直ちに其の打たれた右の目を押へるのは通常誰でも爲ることでありませう。然るに打たれた方は捨てゝ咄嗟の間に打たれない健全な目を保護して敵の第二擊に備へた。劍道に於ては十兵衞、幼より此の臨機の才があつたのであります。吾々が世に立つて事を爲し功を成さんとするには、何によらず此の臨機の才を以て事件の變化に應ずるといふ心の働きが無くてはなりません。是れ亦成功の一要件であります。

果斷の勇

次に成功の必要條件として數へねばならぬのは果斷の勇であります。先見の明あり而して臨機の才を以て此は斯うなるから斯うする、彼れは彼樣なるに違ひ無いから彼樣せねばなるまい、とよく注意を止めよく氣が附いても、よし！　と敢然決行する果斷の勇氣が無くては、斯樣彼樣と知り得たのは何にもならぬ。知り得たる如く、見得たる如く實行するのでなければ遂に目的の寶庫は開かれる時が無いのであります。時は小止みなく進み行く、世態事相は走馬燈の如く變轉して間斷が無い。事を成すの機は眞に電光石火であります。徒らに躊躇逡巡して居れば、機會はズン〳〵去つて了ふ。ソコを果斷の勇を以てビタリと決して行くのでなくては、切角握つた成功の鍵も掌中より辷り落ちるやうなことに成るのであります。古人も「事を斷ずるは猶癰を斷つが如し。多少の痛苦は忍ばざるべからず」と言つて居りまして、癰は人の身體に出來る性の惡い腫物でありますが、之を切開しなければ終には一命にもかゝる、と言つて切るのは非常に痛いが、痛いぐらゐは命には換へられぬから忍び堪へねばならぬ。一時の苦痛を堪へて一思ひに斷ち切れば、後はやがて快く癒る。それと同じやうなもので、吾々の事業を成さんとする上には種々の障碍が湧いて附き纏ふもので、それらの障碍に打克たねば成功は望まれない。其の障碍を取り除くには多大の困難が伴ふ。困難だからとて逡巡して居ては成功は出來ない。そこで果斷の勇を以て癰を斷つが如くに事を斷じて行くといふことが必要なのであります。彼の保元の亂の時、鎭西八郎爲朝が策を獻じて、必勝を期せば夜討に限ると躊躇して居ては必ず敵に先んじられようと云つたが、左大臣賴長は王者の軍に夜討などを用ふべきでないと云つて採用しなかつた。爲朝は退いて、長袖者流兵を知らずと罵つたが、果して義朝に夜討をかけられて、味方は遂に散々に打敗けた。爲朝の必勝の戰略も、賴長が臨機の才無く、果斷の勇が無い爲に何の功も奏するに由無かつたのであります。また織田信長が桶狹間の一戰に今川義元の首を得た如きも其の一例で、今川氏は海道に雄視した其の强大なる勢力を以て大軍潮の寄する如く攻め上つた。之に對する織田氏の勢力は衆寡もとより其敵で無い。そこで居なが

ら優勢なる敵の侵略を受けるよりも、進んで一擧に雌雄を決するに若かずと、暴風雨に乘じて直ちに敵の本陣に切り込んだ。信長は確に、臨機の才に加ふるに果斷の勇氣を以てしたもので、また漸次勢ひを得て遠近を平定し、遂に天下に覇を唱ふるに至つたのも彼が常に果斷の勇を以てしたに由らざるは無いのであります。之は勿論、兵法軍事の上ばかりで無く、吾々が日常事に從ふ上に於て、此の果斷の勇氣が無くては一も其實を擧ぐることが出來ないのであります。

堅忍の志

然らば果斷の勇さへあれば何でも實行して功を擧げられるかと言ふと、果斷の强い意志があつても、其の意志を持續して行かねば眞に萬難に打克つことは出來ない。卽ち堅忍の志が無くては最後の勝利は得られないのであります。血氣に逸る青年の士には、果斷の勇はあつて一時猛然として驀進しても、堅忍の志が無い爲に、間斷なく起伏する諸種の困難に打克つことが出來ずに、半途に挫折して功業を成し遂げ得ないといふのが少くない。例へばこれまで文學

が非常に面白いと言つて熱中して居たのが、忽ち何かに感じて法律を遣り出す。新に法律を始めれば今まで修めた文學方面の實力は殆どフイになつて了ふ。それが惜しいといつて躊躇するやうなことはしない。そこが果斷の勇がある所以で、昨日まで沒頭して居た文學をば弊屣の如く捨てゝ顧みず、今日は奮然として新しい目的に突進する。併し惜しいかな堅忍の志が無い爲に、どうも法律では今後の社會に身を立てることは六つかしい、一つ醫者にならう。とまた其處に果斷の勇を振つて法律を捨てゝしまふ。暫く醫學を修めて居るうちに、中々醫者で世を渡るやうになるのは容易ぢやない、何でも今後は實業に限る。とまた其處に奮然として果斷の勇を振ひ之を捨てゝ商科などへ入る。斯ういふ風で一の學校を卒業するだけでも非常な時日を空費せねばならぬし、またさういふ人は、どうやら學校を出るは出たものゝ、社會に立つて事を爲すに、矢張り同じやうな遣り方で、銀行員になつたり、會社員になつたり、或は店員になつて見たり、さうかと思ふと教員になつて見たりといふ風で、絶えず彼を捨てゝは此に移り、更にそれからそれと變轉して、無暗に身を跳きつゝ遂に成功の期を得ないでしまふ。斯くの如きは

到る處に果斷の勇を示すが、堅忍の志が無い爲に、ジツクリ落着いて其事を最後まで完成するの執着力を缺くものであります。私達は此點に於て彼の南亞の奇傑セシル・ローズを學びたいと思ふのであります。

セシル・ローズは今より六十餘年前、英國の片田舍なるハートフオドシアイアに牧師を父として生れたのであります。十七歳で中學を卒へたが、生來蒲柳の質で體力日に衰へ大學に進むに足らざるを知つて遠く亞弗利加に遊ぶことにした。長兄が南亞のナタルに農業に從事して居たのを賴つて往つたのであります。已むを得ずして學を捨て孤影蕭然として天涯の羈旅に上つた病少年、そこに果斷の閃きが見えるではありませんか。併し彼は、單に果斷を以て盲進するのみで無く、之に加ふるに拔くべからざる堅忍の意志を以てしたのであります。彼が南亞に着いた時は兄は金剛石坑を尋ねて遠く北方に去つて居なかつたが、彼は直ちに兄の遺した農地を耕して棉花を試みた。而も無經驗な少年の此の試みは失敗に歸して刻苦は徒勞となつた。が彼は其のくらゐのことに屈するやうな意氣地無き少年では無い。人の嘲笑を顧みず更に第二回の

試作を試みた。而して今度は美事に成功して彼は玆に自己の大地を開くの基礎を築いたので、後年彼が困難な事業を企てゝ人がそれを危ぶむ場合の如き、彼は何時も「あの時は誰も私の棉作を危ぶまないものは無かつたではないか」といつて勇往邁進したといふことであります。後、長兄がキムバレーに於て金剛石坑を開いたので、彼はナタルを棄てゝ直ちに此に赴き、開掘に從事すること一春秋、着々功を奏して渺たる一少年ローズは忽ち巨萬の產を作ることを得た。のみならず南亞の氣候は其の病軀を治して復び學問に親しむことが出來るやうになつたので、彼は當初の志を果すの念止み難く、遂に本國に還つてオツクスフオド大學に入つて中廢した學業を完成し、バツチエラー・オブ・アーツ並にマスター・オブ・アーツの二つの學位を得た。而してまた去つて南亞に到り、其の學び得た實力をケープ殖民地に試練した。彼の斯うした果斷と堅忍とは常に萬難を排し、事毎に成功して着々地歩を占め少壯三十七歳にしてケープ殖民地宰相となり、夙に抱懷して居た亞弗利加大陸南北縱貫の雄圖に向つて着々成功を收め、人をして南亞のナポレオンとまで謳はれた。是れ皆彼が果斷に加ふるに堅忍を以てした結果に外なら

ぬのであります。其他古來の學者、宗教家、政治家、實業家、何れの方面にもせよ功業を後代に遺せるもの一に此の堅忍の志を以て千挫百折、不屈不撓に邁進した結果にあらざるは無いのであります。

同情の仁

以上數へ來つた條件は成功を期する者に缺くべからざるものであるが、これではまだ完全に最後の勝利は得られない。今一つ最も重要なる條件がある。それは同情の仁であります。世の中は一人孤立して行けるもので無く、他と共同して始めて何事でも出來るものである以上、自他互に同情し相依り相助けて行かねばならぬ。我が爲さんとする事が、若し他の總ての人から反對されるものであつたならば、如何に果斷の勇あるも、如何に堅忍努力するも到底成功の出來るものではありません。故に自分の成功を願ふ者は、また自分の利害のみを考へずに、同時に他人に對して常に同情の眼を以て見てやらねばならぬ。人に對して潤ひのある溫かき思ひ遣

りがあれば、人も亦親しみの情を以て吾に對して來る。吾、彼を助ければ彼も亦吾を助ける。古人が「仁者敵無し」と言つたのも此處のことで、互に相愛し相助けるところに吾一人のみならず、自他共に成功することが出來るのであります。德川家康が信長と力を合せて甲斐の武田氏を滅ぼした時、敵の大將勝頼の首が實見に供せられた。其首が信長の前に置かれたとき信長はハツタと睨みつけて、「汝青二才よくも此の信長に敵對いたした。身の程知らぬ愚もの、成れの果てを見よ」と大に罵つた。次にそれが家康の前に供せられた時、家康は大國の主に對する厚き禮儀を以て之に向ひ「亂世武門の慣ひ、互に敵となり味方となるは是非無きこと、さりながら、いつかは互に手を取り合つて親しき物語りする折もあらうと思うて居たに、痛ましや斯の如きお姿に成られたか」と、ハラ〳〵と涙を落して敵將の死を悼まれた。打漏らされた甲斐の遺臣共はこれを傳へ聞いて、天晴れ血あり涙ある大將よ、斯の如き大將の爲には身をも惜しまず命をも捨てん、と皆感動したといふことであります。信長は飽くまで死屍に策たんの冷酷な態度であつたが家康には一片溫かき同情の潤ひがあつた。それが驕て一は覇業半にして壯士

を本能寺一夜の灰燼に歸し、一は天下の人心を收攬して三百年太平の基を開いた所以であつたと謂ふことが出來ませう。他を愛すれば他も亦我を愛する、內に同情の仁ある者の事業は、常に他の同情を惹き、人は其の事業を援助し、其の成功を謳歌し讃歎するに至るので、功業は自然に完成されるのであります。

犧牲の精神

既に同情を以て互に相依り相助けて行かうといふ以上、其の利益を圖るといふのも單に自分ばかりのことを考へてはならない。自分よりも更に大きく國家の爲め社會の爲め廣く人類の爲の利益と幸福を圖る、卽ち同情より出でたる犧牲の精神が無くてはならぬのであります。昔から多くの志士仁人忠臣孝子等の後世に人を感憤せしめる行爲は、皆此の犧牲の精神に依らざるは無いのであります。それらの事蹟は枚擧に遑あらざるほどありますが、玆に一例を引くならば、土生玄碩の如き、まさに犧牲的精神の權化と見るべき行爲を遺して居るものであります。

玄碩は今より凡そ百五十年ばかり前の眼醫者でありますが、人と爲り奇骨を帶び、專門の研究にも遙に群凡を拔き、名聲一時に喧傳された名醫であります。文政十年和蘭の醫師シーボルドが日本へ來た時、玄碩は其の眼科に精しいといふことを聞いて、幕府に請うて之に師事し熱心に研究を續けた。シーボルドは玄碩の研究及び其の技術が殆ど自分と暗合するほどであつたのを歎稱したが、或時玄碩に語つていふに、「此處に一の靈藥があつて、それを點じて瞳孔を散大せしむれば手術に大に便利である」と、玄碩は之を敎へて呉れと請うたが中々敎へない。熱心な玄碩は尙も懇請して已まなかつた。其處でシーボルドは、「若し將軍から拜領の紋服を私に呉れたら敎へよう」と言つた。玄碩は幕府の侍醫として曾て將軍から三葵の御紋章付きの紋服を拜領して居たのであります。當時妄りに外人に物を與ふることは嚴禁されて居たので、殊に將軍家の御紋章の付いたものを與へるなどは死罪を免れぬところであつた。玄碩は大に當惑した。其の藥品が傳はれば我が眼科手術に大なる貢獻が出來る、といつて紋服を與へれば一死を賭するの覺悟を要する。此の一事眞に命がけであります。彼は遂に決然として考へた。「此事

露れて罪せられるにしても一日二日の猶豫はあらう。其間に傳はつた藥法を他に傳へて置けば、身は死すとも法は永く我國に傳はつて多くの人を救ふであらう。生れて醫となり醫の爲に一命を賭すること何の躊躇することがあらう」と、遂に拜領の紋服を與へて其の藥品の原料を教へて貰つて、紋服を與へたことは間もなく發覺して玄碩は罪せられた。併し死罪は許されて改易の上蟄居を命ぜられ、後に養子玄昌が治術の功によつて赦されたといふことであります。其の罰せられたのは幸にして輕かつたが、其命を賭して世の爲め人の爲に圖らうとした志は實に壯絶と謂はねばなりません。事は小さいやうであるが、玄碩の如きは身を殺して仁をなすといふ仁人の精神を立派に體現したものであります。身を殺して仁を爲すといふが如き、そは姑く最も高く最も大なる德であるとするも、吾々が日常事を爲すに於て、同情を以て他に對し自分より大きな利益の爲には自分を犧牲にするといふ精神が無くてはならぬといふことを忘れてはなりません。

以上數へて來た諸條件は、たゞ平凡な德目を上げたに過ぎないやうでありますが、是等の諸項目に於て一々最善を盡すならば、よし其の地位其の境遇等により種々外圍からの壓迫障礙はあらうとも自から進んでそれ〴〵の方面に着々成功の鍵を捉ふることが出來るのであります。

一以て貫く

而して是等の諸條件を一以て之を貫くものがある。一とは何か、曰く誠であります。人はいつでも、何事でも、其の根本精神は至誠以て事に當るといふのでなくてはなりません。如何に明察の知見があつても如何に周到の用意を以てしても、また如何に臨機の才あり果斷の勇あり堅忍の志ありとも、其の源泉至誠に出でざるものは徒らに他を害し自から苦み事成らんとして成らず、九仞の功も一簣に缺くを免れない。また同情の仁、犧牲の精神も若し至誠を以て根本とするので無くては、よく之を他に徹底することが出來ません。誠は天の道なり之を誠にするは人の道なり。至誠以て終始一貫すること是れ人の人たる道、人として人の道を踐まずんば何

事も成るものでない、誠は成功の源泉であります。而して此の源泉が流れ出でゝ四通八達、以上の諸條件となるものであります。源泉若し涸渇して居ては、末流を逐うて清冽の一滴を掬せんとするも能く得べきではありません。人若し此の本末終始する所を知り、以上の諸要件を身に具して、而して之を貫くに一至誠を以てするならば、成功の鍵は到る所に拾得せられ、理想の寶庫は八面に打開せられるのであります。運は天にありと雖も、之を開くは人にあり。成功の原因には、遺傳とか境遇とかの外部の力もありますが、それをも左右するの力は其人にあると思ひます。

昭和四年三月十日印刷
昭和四年三月十五日發行
昭和十年十二月二十日五十版
昭和十四年二月廿五日五十八版

人の心
定價金參圓五拾錢

著作者　加藤咄堂

發行者　東京市小石川區高田老松町六十番地　酒井一二六

印刷者　東京市神田區神保町三丁目廿七番地　小關求馬

發行所　東京市小石川區高田老松町六十番地　有朋堂
電話牛込五五七七番
振替東京四四六五八番

不許複製

388
116

終